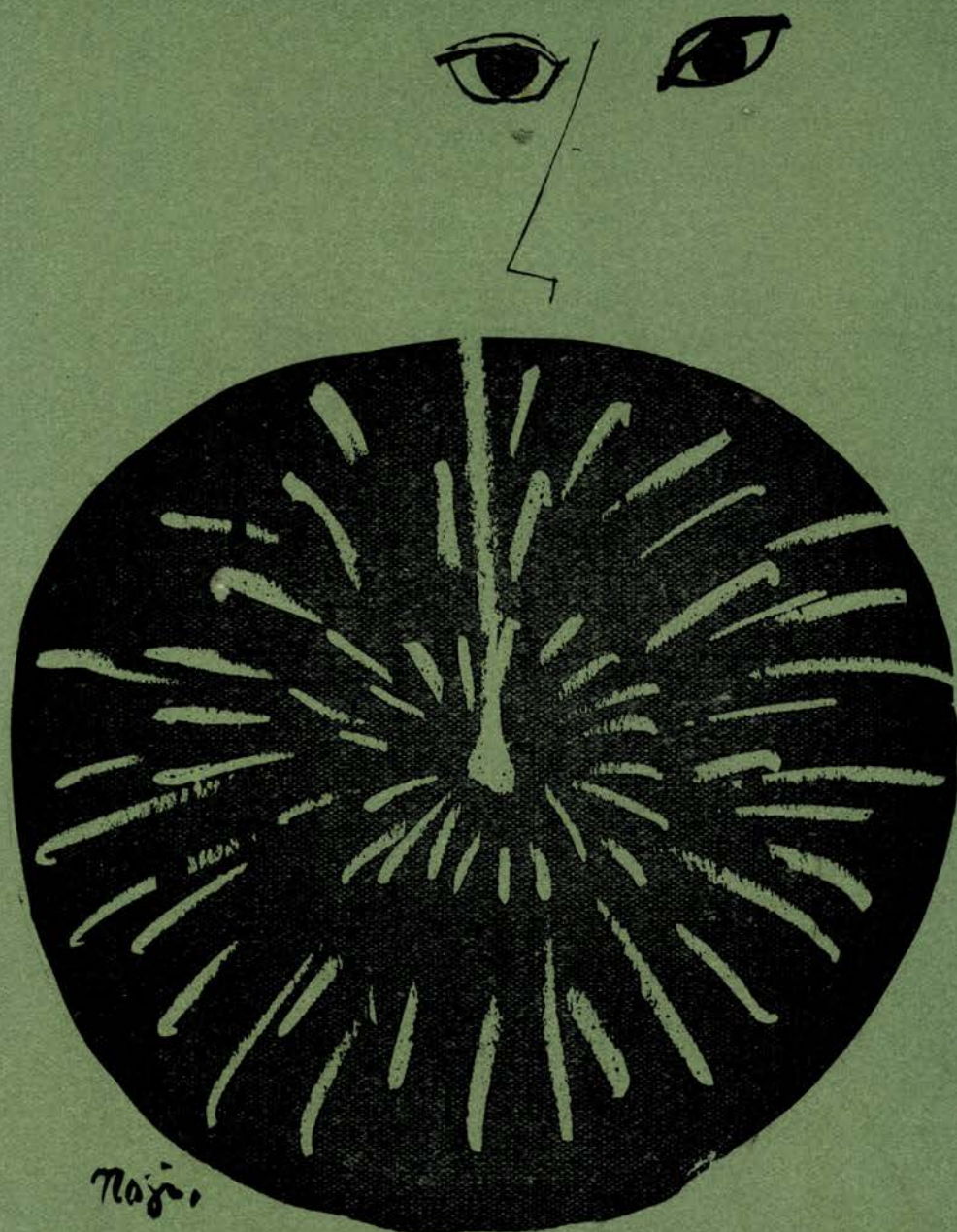


証の柳川

麻生路郎☆主宰



No. 410

七月号

No. 410

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

川柳 まつり



優勝楯に挑む川柳コンクール

一年一度の川柳まつりです

日時 7月16日(日) 午後一時

会場 大成閣(電話 五二三八/九番)

南区大宮寺中五丁目二六

心斎橋大丸北ノ止東五(永北側)

司会 松江梅里

開会の辞 若本多久志

兼 柳 中島生々庵

席 題 中島生々庵

外 題 中島生々庵

大 題 北川春男選

作家 上村文雄選

聖 書 西尾 繁選

「天目」 川村好郎選

席 題 吉田圭井堂選

席 題 当日 演説表(各題三句)

★特別課題「気軽る」発表 麻生路郎選

星 賞 ★名題天地人・生々庵選(天位に不朽制賞)

★特別賞 金賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 銀賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 銅賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 奨励賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

★特別賞 佳作賞 川柳まつり実行委員会

8月本社句会
兼 題
み 兼 題
や 兼 題
け 兼 題
・ 兼 題
作 兼 題
食 兼 題

川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目二五

電話 六八〇八

あなたの句帖が
出来ました



★路郎好みだけ
に、すばらしく
気がきいていま
す。句会でお使
いになるなり、
抜けた句の整理
にお使いになれ
ば、何冊かで、
あなたの句集の
礎欄が出来ます。
父卿友への贈答
に、句会の賞品
にも最適です。
是非ご利用下さ
い。
一冊五五円(文庫)
十冊五〇〇円(文庫)
送料別

風流 人間横丁

東野大八著

B 6型 二五八頁

250円 送料70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって
弾還した著者のザクザクバラバラな人生批判
が、その雄筆からはとばしるさまは凄
い。まるで腕の研えた板場の切れ味にも
似ている。★本稿は戦後十三年間、「川
柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクた
りしものに補筆した雄編である。後半に
川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読
物としてお薦めしたい。

発行者

大阪市住吉区万代西五丁目二五

川柳雑誌社

振替口座大阪75050
電話 大阪 6081

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

一行詩 あぐらをかいて見せるなり

台どこへ主婦を残して夕涼み

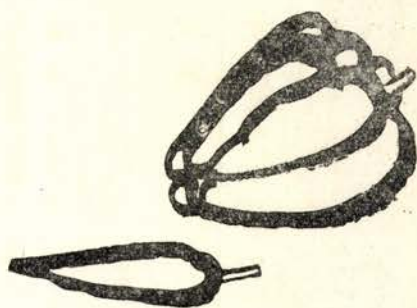
奥さんも負けずに飲んで涼んで来

豚まんの土産BGさんと知れ

日本銀行ドアを押してる人を見ず

デパートでスローの母が眼立つなり

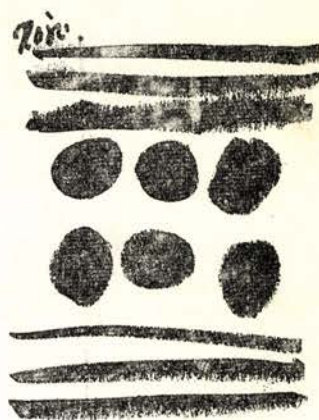
草野球母呼びに来てピッチャー去ぬ



川柳雑誌七月号目次

不朽洞句帖	名句と難句	行脚と汗	蘭三と南葉	川柳ILO	川柳に關係のある話	オーミステーク	句評リレー	続・川柳料理歴	七小町	断食で闘った糖尿病	★現代柳人録	豆秋さんは立派な詩人だった	作品は人間である	川柳と宗教	得難き人	豆秋さん勉強します	追悼句	★不朽洞の人々	絵と川柳で表現する歴史	川柳塔	同舟近詠	近作柳樽	金泥集	各地柳壇	★柳界展望	入門講座	一路集	★柳樟室
題字：麻生路郎表紙：野尻弘											(30)							葉氏の巻										
(3)	(4)	(18)	(12)	(32)	(13)	(25)	(28)	(31)	(26)	(20)	(35)	(15)	(14)	(16)	(17)	(17)	(15)	(41)							(40)		(46)	
麻生路郎	麻生路郎	後藤梅志	東野大八	三司・水客・多久志	大野風柳	武部香林	宵明・遠二	水谷竹荘	富士野鞍馬	吉田圭井堂	★川柳書架	小野十三郎	森下冬青	戸田古方	武部香林	山阿茶	阿倍野支部	★社の黒板	戸田古方	麻生路郎	諸家	麻生路郎	北川春乃	麻生路郎	清水白柳	小西無鬼	太田良子	小浜牧人
▼ベンの散歩																												
(46)	(39)	(38)	(36)	(41)	(42)	(37)	(20)	(27)	(6)	(34)	(46)																	

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘



柳川 名句と難句

麻生路郎

〔一七六〕

ヘッチャラやこいさん逆立ちして見

せる

(風船堂)

末っ娘は昔からおてんばと相場がきまつていたが、それでも昔のこいさんは逆立ちまではしなかった。

それがアブレのこいさんにいたっては逆立ちぐらいはヘッチャラでやってのける。

凄じさは時代の罪なのであろう。こいさんの変遷史といった句だ。

こいさんは末の嬢さんの意、こいとさんの略である。いとさん、なかいとさん、こいさんの順だ。へっちゃらは平気だ、何んでもないという意。

〔一七七〕

院長があかん言うてる独逸語で

××病院の診察室。

患者骨皮筋工門が、肥太院長の診察をうけているところで幕開く。

院長が、ノドへ詰まったような声でベラベラと喋べる。

助手がしきりにカルテを書く。

院長ベラベラ。

助手のペンがサラサラと動く。

院長が今度はベラ、ベラ、ベラと少し長くしゃべられる。

患者にはドクツ語が通じないので、あかん言うてはると勝手な解釈をするところに病人らしさがあるが、それにもかかわらず、句の上に少しの悲観的な暗影がない。

むしろ、下五の「独逸語で」がユーモラス

(豆秋)

な味を出して患者自身ノ嘔吐さか思わされる。

〔一七八〕

人智無限只今地球をひと廻り

(多久志)

地球から離れて地球を見た人類史上、最初の人が出現した。人間の持つ最大の夢が実現した訳だ。句にはその感激ぶりを充分に盛りあげてはいないが、夢が実現した驚きだけは伝えている。

次に、その歴史的記録を簡単に記しておく。ソ連の宇宙開発陣軍は一九六一年四月十二日、ついに地球を回る人間衛星船「ボストーク(東方)号」の打ち上げに成功した。ユーリ・アレクセービッチ・ガガーリン降下部隊少佐が乗った衛星船が十二日午前十時五十五分(日本時間同午後四時五十五分)に地球を一周してソ連の予定地点に無事に帰着したのである。

そして、十二日のモスクワ放送は最初の宇宙旅行者ガガーリン少佐の経歴を次のように伝えた。ユーリ・アレクセービッチ・ガガーリンは一九三四年三月九日にロシア共和国スモレンスク州グジャールツキー地区のフルホーズ(集団農場)員の家族に生れた。四一年中等学校に入学したがヒトラー軍の侵入によって学業を中断せられた。

第二次大戦後、ガガーリンの家族はグジャールツク市に移った。そこでガガーリン少年は中等学校の学業を続けた。五一年モスクワ付近のリューベルツイ市の職業学校の銑工専門課程を優秀な成績で卒業、同時に労働者青年学校を卒業した。続いてガガーリンはボルガ川畔のサラトフ市の工業技術中等学校で学び五五年優秀な成績で卒業した。ガガーリンは空への道を同校時代にはじめた。彼はサラトフ航空クラブで学んだ。航空クラブの課程を五五年に終えたのち、オレンブルグ市の航空学校で学び、五七年一級の成績で卒業して以来、ソ連空軍に勤務している。六〇年に彼はソ連共産党に入党した。妻のワレンチナ・ガガーリナ

は二十六才。オレンブルグの医学校卒業である。二人の子女をもち長女エレナは二才、二女ガリーヤは一カ月。また五十九才の父親は家具工として働いており、母親アッナは五十八才である。

「一七九」

初の宇宙船成功

祝電を打つアメリカの手がふるえ

(与根二)

ソ連が衛星船「ボストーク号」打上げに成功したので、ライバルのアメリカが祝電を送った。それを「アメリカの手がふるえ」と視た辛辣さは十七音文学の独壇上と云えよう。

「一八〇」

お金を大切にしろと百円札に言われ

(雄 声)

その昔百円札は庶民の手には容易に渡らなかつた。百円のサラリーマンと云えば羨望的だった。当百の句に、「百円札残念ながら拝ませれ」というのに見てもうなずけるだろう。

それが、貨幣価値の下落で、近ごろの百円札と云えば、市場通いの主婦達もツシツかみであるか、エプロンのポケットから敏くちやのまま、引っ張り出す冷遇さであ

「一八一」

この人に生活力ありと見て恋いぬ

(喜 由)

むかしは大抵の娘がヤサ男に恋したものだが、

せつかく、その恋が、かなっても、男

に、金もないし、力もないので、おしまい

は悲劇に終わったものだ。ところが、今ど

きの娘さんは、そんなセンチな恋はしな

い。この人に生活力があるか、どうかを見

きわめてからでないと恋はしない。ナカナ

カにチャッカリしたものだ。恋はしても結

婚はしないと、結婚はしても約束結婚と

云って年限を切って解消するとか、すべて

はサバサバとしたものだ。勢い相手方の生

「一八二」

車掌から世話焼き切符中継し

(与呂志)

常に世話焼きはうるさがるるものだが、世話焼きがいなくなると、一向に進

行しないこともある。

この句、車内風景のスケッチとして面白

い。頼まれもせぬのに、車掌の切った切符

を、とりついでやるのを往々見かけるが、

これも社会のジュンカツ油には違いない。

比較的硬い下五の「中継し」が、この句の

ヤマだ。

「一八三」

首のないオルグが陣頭指揮をとり

(井 蛙)

ガムシャラ時代というのか。味気ない時

代というのか。以前は首を斬られたらシェ

ンとしたものだし、ハタも相手にしなかつ

たものだが、近ごろは首のないのが、いき

いる机

(鳥 語)

アタマ数は沢山いても、即答の出来ぬ下

ッ端ばかりではサッパリ要領が得られない

のでウンザリするものだ。この句は大き

なお役所風景を皮肉ったものであろう。

「出来ぬのばかり」の「ばかり」がよく利

いている。

「一八五」

煙草のけむりも窓から出て行けり春

(薫 風子)

はのほのとした句だ。うららかな春だ。

誰れも彼れも、どっかへ出て行く。静かに

タバコをくゆらしていると、煙りまでが、

レジャーをたのしむ

おけいこ教室

松坂文化クラブ

お茶・お花・書道・人形・劇烹

バレエ・長唄・小唄・邦舞

音楽・社交ダンスなど

お申込は7階文化クラブへ
TEL.63-1171



月曜定休
松坂屋

大坂日本橋

お買物は駐車場完備のマツザカヤへ



奈良県 上田 翠光

人妻の病みやつれてて美しく
寝台の凹みに添うてやせて居る
生命の記録カルテの字は読めず

大阪市 土井 文蝶

てれかくし煙草一本所望して
制度とや働く者に味方せず
理智冴えて恋永遠に帰り来ず

西宮市 若本 多久志

名を問えば幸子と言いぬ湯女ゆめ寂し
公休を訊けば先約おますネン
女の世界好きと嫌いに二分する
国交へヒューマニズムを忘れかけ
ストやれる羨ましきの廻り椅子
人生も午后三時なり水を飲む

大阪市 正本 水客

一時間ですむ引越へビール酒
しわくちやの札よって月賦払うておき

ダンブカーの運転手ですと悪びれず

大阪市 西 いわを

無駄を尊びなさいと教えられ
風呂上り女浴衣の儘迎え
悪遊び止めてギターを習い初め

岡山市 武部 香林

見えていた頃の知識でわたり合い

大阪市 北川 春渠

コンサート演者の無我の境を見る
相撲野球宿題できぬようにでき
多くを語らずゴーイング・マイ・ウェイ
通り抜けへロハのパン屋も待機する

大阪環状線開通(二句)

環状線みんな試乗の顔に見え
車窓から坪何万を見て走り

ホノルル市 羽佐 周柳葉

酔いの原因風邪の一人っ子

新任のボリス規則です規則です

堺市 吉田 圭井堂

台閣に野人で置けばよいものを
代診を常時雇うて振るクラブ
黄昏れて来ても水車は慌てない
川埋めりやどが船場かいとはんか

クラス簿に釈何々が目立って来

山口県 長野 井蛙

鉄扉堅くデモの罵声をはね返し

公休を妻足止めのプラン立て

事ズバリ言い当て女の気を損ね

大阪市 太田 良子

おとなしい夫おとこやないのつつかれる

こんなが夫婦やろかと淋しがり

岡山市 直原 七面山

お帰りがなくて北風つのるのみ

五十五軒火元はちっちゃい焼いも屋
終学旅行の思い出先生としたキッス
世話好きの女房サルマタまではかせ
転勤を逃れるための家を建て
ランデブー女食うことばかり云い

大阪市 西森 花村

香水の匂いに狎寝眼を開き

無理をした毛生え葉が眼に流れ

禪の仕方もしらぬ右翼が居

鳥取市 河村 日満

メーデーにプラスバンドも利用され

メーデーの漫画首相の首が飛び

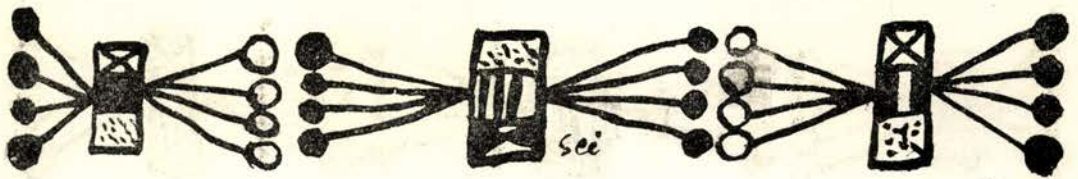
低能の腰も女の線となり

お金には全く弱いうちの二女

倉敷市 木村 千容

魚島の鯛オズオズといただけり

バラの花一枝嫁のために切り



加賀市 野村 味平

斗病へ柳魂だけは衰ろえず

出雲市 尼 緑之助

四国小豆島を巡る(二句)

松林やないのと栗林あきられ

島に居て島はどこかと小豆島

ほつねんと暮した過去のいとおしく

大阪市 木村 水洞

職業欄用心棒と書いてなし

会社がつぶれて月賦屋が慌て

親の義務だけはうちの子知って居り

高槻市 福田 丁路

絞れるだけ絞れば用のない貴方

伊豆周遊

曇後晴で楽しい三原山

大阪市 真鍋 一瓢

世間並世間並にの無理工面

金の成る木を植えた家への歯ざしりよ

今日は椅をはく春陽普ねし

誰れも政治に腹を立てているおかしな話だ

一生酒を呑んだか酒屋への書置は無い

米子市 小西 雄々

鼻息が株で儲けて荒くなり

ご婦人の好感をよぶ低姿勢

サービスの事にはふれず値上げをし

三嶋笑氏を見舞って

大阪市 山川 阿茶

米人間ロケット

金持のつらさは意地を張り合うて

誕生

力づよいおぎやあだったが女の子

鯉のぼり風のない日もあると知り

日本ブーム額を逆さにかけて愛で

レジャーブームそれでも義理は欠き通し

ビジネスにくたくたそれでも浮気はし

大阪市 金井 文秋

鯉のぼり窓に団地の風が吹き

服装から唄までわけのわからぬ世

生活の疲れ無口な人にする

暗がりでおッサンと呼ばれギョツとする

子には子のウッブンがあり皿を破る

初めての子へ二人して遊園地

加賀市 那谷 光郎

教養は酒に飲まれぬ酒をのみ

訪問着名士へお茶汲むだけの役

予期しない汗かく琴平竹の杖

ケチが住む庭にも春よ花が散り

下関市 桜川 不水

チューリップババママ坊やと輪になって

ドドンパにおびえ人出に又おびえ
無粋なり夜のしじまへオートバイ
大ボス小ボス飲むことの続く村
訪う人もなく国宝に日が長し

京都市 大鶴 喜由

母にも明さず十七の不眠症

蝸牛の如と触るればちぢむ十五六

無防備は侵されるもの娘の座

入墨は入墨なりに怒ったり

尼崎市 小林 文月

名古屋へ出張

原色のままに菜の花広く咲き

百田の靴下買いし出張前

会社の慰安旅行会

見物の頭上に一つ鳩のファン

給料日缶入ビール二つ買い

奈良県 飯降 白香

求職へ生徒はいつになく低姿勢

肌を許しても結婚はいやとBGの

御幸福にと女あつまり別れゆく

呉市 林 野甦光

薬剤師に致死量ちゃんと教えられ

誰にでも云うのに男もう夢中

それでこそ男だなどと煽るとき



大阪市 岸 南柳

落書の日付はさっきいたもの

岡山市 津田麦太様

秋晴れに浮世忘れたうきがひく
努力だけでどうにもならぬ世をなげき

岡山市 服部十九平

落城の悲史知らぬげに花が咲き
ひと頃のように拍手をしてくれず

金で動く味方を持って気が疲れ

尼崎市 長谷川三司

意見する口は小金を貯めている

夏雲の我れにやり場のない憤怒

惜しみなく愛して妻をオイと呼ぶ

岡山市 田村藤波

勝負にはこだわるなとは表だけ

ご満足でしょうと宿酔からかわれ

気をつけておれど入歯の鳴る悲哀

児島市 本田恵二朗

流行の靴けられたら刺りそう

京都市 松川杜的

式服を脱いで思い切り足を伸す

ハネムーン見送る方が照れくさし

スリッパの音もお目出度いリズム

鳥取市 森本法泉子

木次線にて

割子そば山の味覚は塩からし

宮島の丹寝不足の眼にうれし

耕三寺にて

街路樹の瘤にも馴染む靴磨き

堺市 高崎雄声

御先祖の墓を氣にするほど儲け

取引のように血圧訊ね合い

島根県 藤井明朗

立志伝株の話で死んで行く

鯛の眼をつつき病床まだ癒えず

警棒ヘメーデー今日はにやりとし

誕生日本人外で砂まみれ

岡山市 永松東岸

気短かなババが小鳥へ餌をやり

俺も悪かったわいとあっさり出る電話

病院のストヘ菓の五日分

辞書にまだ礼義の文字は残っており

倉敷市 野田素身郎

死期知った人の言葉に嘘のなく

連休も所詮子供の守ですみ

病院の土筆患者に似て細し

大阪市 木村十悟

そぞろ歩きの人になかなか日が暮れず

常識をはずす勝気を持て余し

賭で食う男になって働けず

豆秋氏追悼

白骨になって「ふるさと」光り増し

大阪市 伊達堰子

碁に強いそれで守衛の名が判り

お目出度に貸して硯の垢が取れ

淀屋橋民事通いも二年越し

豆秋さんを偲びて

ちぎれ雲どう引きとめんすべも無く

大阪市 不二田一三夫

豆秋氏の遺書

賑やかに通夜してやと遺書かなし

欲求不満妻の日記にチトあわて

保険屋と創価学会が来る厄日

にぎられて手の豆感じるたくましき

子のために不貞の妻の詫びを入れ

落語作家槐村正治氏ガス自殺

遺書というサゲも書かずにガスくわえ

兵庫県 酒井ひか平

薬くすり足先から頭まで

オートメで泣いとれもせぬお骨上げ

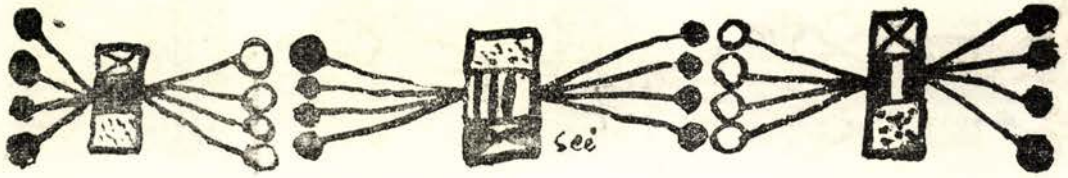
耕うん機嫁鉢巻きで運転し

宇部市 津秋六花

ダンブカーに乗るを保険屋狙って来

後添いの名で学資をば届けとき

芦屋市 丸川初甫



へそくりを枕に敷いて病みつけ
いつ見ても本日限りの宝くじ

唐津市 新岡 回天子

世の中を初めて見るように試歩あるき
抵抗のあと歴然と顔を見る

岡山県 池田 古心

兄弟も子も無く守銭奴どうする気
こんな筈ではなかったに山は禿げ

東京都 石居 高志

夜の汽車坊主も洋酒好きという
土産より小遣がいい年令になり
ネグリジェを作る意見に逆わず

大阪府 早川 清生

アルサロへよく行った頃よく稼ぎ

孤児院の出身童話知りつくし

くに捨てて異国で料理売る華僑

ボクサーをやめてスラムへ去るネグロ

落日に影のつらなる漁夫の墓

阿蘇雲仙連れられ癌と知らぬ妻

岡山市 武部 若菜

有本芳水詩碑除幕式にて

少年は老いたり詩碑へ涙ぐみ

文化財補修を急ぐもの許り

堺市 辻 圭水

逃げ腰へ師としてつらい愛のむち

有効に余暇を使うも若きなり

麻雀の疲れと知らず御苦労さん

加賀市 中松 恒雄

宮様に手紙書いてる精神科

何気なく抜いた鼻毛が白毛なり

鉤子持つ芸妓末座を素通りし

大阪市 児島 与呂志

もう初夏となりぬ金魚の尾のゆれる

転んでいった一円玉を追う車掌

N 前所長を送る

満ち足りた勇退なれどある別離

岡山県 野々口 美舟

母と呼ぶ人を持たない日の孤独

母の日を母と黙って草を刈る

西宮市 小浜 牧人

若葉並木だ腕を組もうよ

税金を使う面白さは知らず

縄張りを桂馬のようにのし歩き

デザイナーバリーの夢を抱きつけ

兵庫県 前川 左文字

ラッシュアワー炙の皮をはがれたり

ラッシュアワーどこのだなにおんぶされ

ラッシュアワーのいたずら燃える手が触れし

女学生ハイヤー飛ばすのも芦屋

岡山県 池上 知恵美

当然のことが守れぬ山登り

春雨へ一緒にぬれるひとと来ず

末っ子が出て大学の縁も切れ

後髪ひかれて易に頼り切り

大阪市 橘高 薫風子

棺の出たあとの夕焼見事なり

おしなべて銀も鉛も卒業す

豆秋さんを悼む

七七忌金魚の糞もただならず

下関市 中村 九呂平

箸割って渡せば無理に茶碗持ち

大阪市 西川 晃

豆秋氏を偲ぶ(二句)

死期を待つ眼にむこいまで碧い空

「借金なし」遺書の結びの字も確か

釜ヶ崎風景

なん(ぬ)かしてけっかんねんと十九の娘

臨終へヒモ(情夫)はバクチに行ったまま

ガード下娼婦聖女の顔で死ぬ

鳥取県 田中 蛙眠子

黙殺にされたときから人を忌み

私鉄スト運ちゃんキャッチボールする

岡山市 林 葵丘

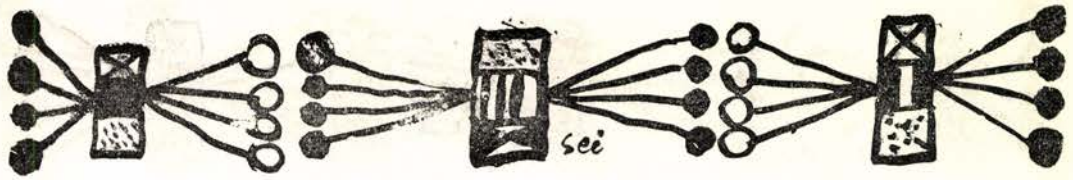
孫抱いて小便臭さいのものたのし

白い目でデモを眺める出前持

神戸市 仲 どんたく

金のないロマンスグレーのはかなさよ

既成事実作って結婚申しこみ



襟足の魅力へ下車の駅が過ぎ
化けも化けたり六十の藤娘

平田市 久家代仕男

芥子粒ほどのひけ目がそれを言わせない
手っ取り早いよ君豚を飼ひ給え

大阪市 本多柳志

金時計の手に賃上げのブラカード
殺し屋に消させる愛し方もあり

七難をかくすつもり of アイシャドウ

おせっかいな世間がいやなサングラス

大阪市 大谷月都

身体なげ出しあちゃんの席もと

良識にまかせず整理の綱を張り

遊園地かたっぱしから銭をとり

岡山市 江国幽谷

葉また変えて見ようと医者はい

更年期らしいと妻におしえられ

岡山市 光好陽子

連休の旅へ雨風容赦なく

ウインドウほしくなるから素通りし

西宮市 野呂鶴汀

老いた身へ女アクセサリーになり

思慕の情乳房を握りしめながら

浮気一つせない夫が頼りない

西宮市 樋口舟遊

新築の金力あみだほど光り

淡路鳴門観潮

水際の近い所で蛸を売り

新潟県 高野むじな

すねかじる智恵ならあの手この手も出

働くために生きてる如し田を植える

相談の形で行けと教えられ

大阪市 石倉旅風

人形の言葉がわかるおんなの児

ほろ酔いが西を東へ歩かせる

商売にむく散髪をしてもらい

金魚鉢またも洗ったきれいすぎ

大阪市 魚住満潮

続・西成界わい(三句)

小学校さえ卒業しない父と母

ついているうちに女房の物を出質し

ずらかった部屋にピースの煙りのみ

愛媛県 村上旭童

十日程みぬ故里の若緑り

なんぼ洗っても百姓の手

名士です以前どおりにつき合わず

倉吉市 大前鳴悦

老眼鏡かけて厘毛まだはじき

都市計画また百姓をつぶす線

末っ子のしぶとき母の意をかえし

おはやしにのって踊るもめしの種

鳥取市 北村三歩

労働歌ボカンと見てるのもボリス

おっさんおっさんとは僕のこらししい

石一つ投げた波紋がまだ残り

大阪市 和田一乃字

小金ためばーまもろくにかけぬ人

夕焼けの中へ溶けてく子守唄

神戸市 傍島静馬

おとんぼに廻わる小遣母にやり

ともかくもゴルフ焼けた顔になり

リバイバルソングおやじも口ずさみ

大阪市 河井庸佑

ライバルの殊勲の記事が大き過ぎ

満塁へ打順が下位へいく不運

大阪市 小島さぎす

公園に鉄条網が要るモラル

愛妻家らしい市場の籠をさげ

ビルラッシュ異国の街に住むごとし

大阪府 谷沢好祐

年令は不問と変えた町工場

折込みで新旧市場は勝負する

泉大津市 高津徹也

赤ん坊のうぶ毛思わす春浅い庭

一周忌又二周忌と忘却し



山いものかゆき婚約時代の娘

愛媛県 榎 紫 光

男ざらいと女ざらいが式を挙げ

酔いさめて意志の弱さがいやになり

こんな日本へ密航をする人もあり

ママさんに聞いてと誘惑逃げられる

青森市 工藤 甲 吉

一日の始まりを母火を点じ

酔っぱらい法案ちよいと気にかかり

税務署は台風よりも恐く来る

エスカレーターに万引もしゃんと乗り

玉野市 伊原 明 林

浪曲の中の言葉で説諭され

孫といふところを二号に見つけられ

ハッタリの店とは税吏見てくれず

松江市 小林 孤 呂 二

横綱を倒しうまい水を飲み

特急で行けと出張うらやまれ

箆笥のひき手だけ知っている再婚

松江市 舟木 与 根 一

けだものの心が俺にもあった春

すらすらと他人の始末書きいてやり

学歴を問わぬ就職やめておき

三男出生(二句)

末っ子ときめた顔してうまれて来

四ノ十の出産手当てにくさく

豊中市 林 夢 虹

医者呼べぬ生活邪教であろうとも

野菊嫉妬バラは小女の髪にあり

ある焦躁蛇が尻尾を飲む如き

西宮市 山本 一 傘

ボスの顔知った日殺し屋殺される

びったりの役がおつちよこちよいにあり

高知市 建沼 康之 介

信用はゼロ女には愛される

夫婦喧嘩(二句)

一人ずつ子を連れて寝て喧嘩中

安う買う楽しみ質屋とも馴染み

大欠伸してる児もいる参観日

大阪市 今 西 生 董

現役入学余勢で無銭旅行に出

ストの時だけ民衆に媚びるクセ

死者よりも弔詞は喪主を褒めたたえ

高知市 川 竹 松 風

別々に花見に行った共稼ぎ

家でせぬ笑顔をバーの隅で見せ

奈良市 内 海 敬 太

陵守帽子を脱げば白いなり

新聞部にも籍おきオッチョコチョイの僕

ジグザグの渦に私の肉体(からだ)あり

図書館の隅で結婚講座よみ

岡山県 横山 一 声

情熱がさめたかキッスもあほくさし

退院を拍手で送る松葉杖

小松市 関戸 宗 太 郎

鯉のぼりトッポをきって雨に濡れ

ブロック塀梯子のような穴をあけ

信仰が過ぎて近所と折りあえず

石川県 高山 凉 髪

うららかな連休妻の看病し

倦怠期バチンコにさえよう勝てず

ありつたけ不平等こぼせる地位になり

美祿市 安平 次 弘 道

女とは悲し火遊びではすまず

失恋が今日の師匠の舞扇

電話口居留守を使うバイの音

恋愛結婚でない母親を馬鹿にする

新暦に協調します鯉のぼり

から党をやりますごす気の幕の内

矢野赫堂君逝く

さよならのないのがいっそ君らしい

宇部市 平 田 実 男

店員のそれは似合わぬとも云えず

シャッターを待たしも一度バフたたき

交番の隣りの隙をつく空巢

蘭三と南葉



東 野 大 八

大陸奉天時代の柳人に、野並蘭三という作家がいた。

十間房という、鮮媚の群る歓楽街のどまん中にある、酒屋の息子さんだった。

何かこう若さの覇気を身内にたたえきつたような、一見イナセ風、それでいてもの柔かな眼ざしのインテリ風の若旦那だった。

タバコ卸商をやっていた宇和川木耳さんが、この蘭三さんと、酒とタバコでウマが合うのか、彼の人柄と作風をひどく傾倒していて「ランゾウ、ランゾウとブッキラ棒に句会で言うんだナ」といつも眼を細めて彼のこと、だつた。

ある日十間房の、とあるやんごとなき場所彼に出あった。「やあ、これは蘭三さん、つかぬところだ……」

とこちらがいうと、持ち前の、ちよつとてれたフツで、大八さんよ、と呼びかけ「あんた、ユーレイの存在を信じますか」とイキナリ言う。「そんなもの」と、彼より二つ三つ輪下のボクは一笑に付した。(ボクはそのとき二十四ぐらいだったかな)「だろうね、ところがユーレイはいるんだ。ゆうべ、少し仕事があった疲れたもんだから、近くの小料理屋へ行ったんだ。一人でなんだ。おりゃ、独りぼっちの時間が好きだから、女中も仲居も要らない、ポチポチ手酌でやっていたが、そろそろ夜中だつてんで、めにしにした。おれのいる部屋は二階でね、せまい階段の上にとりついた二つの小部屋の一つなんだ。俗

にいうキンタマ部屋さ。紙屑みたいなカケ軸がブラ下つて、床板のチャチなのがその下に置いてある。ヤケに寒々とした頭のつかえそうな部屋さ。

さて、めしを食いかけるとトントンと段ばしこを上る足音がした。女中でもきたんだらう、と何気なく顔を上げたのと、スッとフスマがあいたのと同時代、一人の女とイキナリ顔が合った。合ったと同時に全身総毛だったな、その女の顔は青い玉ネギみたいなんだ。髪をつぶし島田に結つてんだが、それがカツラかぶつたみたいで生え際がない。おまけに、そいつはおれの顔を穴のあくほどみつめながら、片手でクルクル茶盆の丸いのをまるで軽業師の皿回しみたいに回しつづけているんだ。一言もいわない。べたんとしきいざわに座ったまんまだ。紺がすりの荒いのに、赤いタスキを甲斐甲斐しくかけてる。そんなタスキと動き回る皿のおかげでこちらは妙に動きがとれない。ただ一つの抵抗は、ビタリとその相手と合ってしまったこちらの眼だ、まばたき一つできないんだ、パチリとやりでもしたら、ガブリとその相手がこちらのど首へ食らいつきそうなる予感がした「フーン」とボクはついつりこまれて息をのんでいた。

「女の眼はネコミたいだ。ガラス玉みたいにウツロでこれっぽちも感情がない。それだけにこちらも負けていられない。箸と茶碗を両手でもって空間に浮かせたままニラめっこさ。必死さねえ、こちら……。この野郎とも思って歯をくいしばって眼が痛くなるほどだったな、やがてしばし、女はついに、と起き上ってくるりと操り人形のように回れ右をすると、トントンと階段に足音させて下りていった。お盆を相変らずつづし島田の上でクルクル回しつづけたがらだ。ろくろ首のような、細いめん類みたいな細首が、赤いタスキに妙につり合つて色っぽいんだ」「ヘー!?」とボクは小首を大仰に一つひねつてみせた。「一人去り二人去り仏と二人さ」蘭三さんは、そういったあとと緩く微笑した。この彼が口にした句は、彼のオハコ句だったのである。

それから数日後、彼は死んだ。詳しくは記憶にないが、色街の女との情死説がとび出したりしていた。ユーレイの話のあと、突然の彼の死だけに、ボクの感情は複雑だった。ただ、黒々とした長髪が乱れかかる底に光る、彼の冷たい額の白さだけが、今も強く印象に残っている。

戦後四国の大洲へ引きあげた直後、某日本郷川柳社中名うての同人の一人だという一人物に紹介された。紹介した御仁は、棕影さんだったか、曉風さんだったか覚えはない。とにかく五つ紋の茶色の紋つきをぞろりときた、割箸みたいに瘦せた男で、眼鏡が細面からはみ出すほどにみえた。

「わっち、花房南葉」

そう江戸前にいって、中指と人指ゆびの間に、器用にサカズキを止まらせてぐいとボクへつき出した。

ヒゲそり後に…

●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン

配合

男性

200

た。(キザな野郎だ)とハラの内でニガ笑いして、ボクは漱石の「坊ちゃん」の赤シャツを思い出した。

「アレは大した才人だが、家にはくさるほど金があるんだが、いつも金がない、そんな具合で川柳がうまいんだな」

と横影さんがこんなへんてこな註釈を後刻ボクへと試みた。

彼は、妙にボクという人間を愛した。まがな好きがな、酒好きのボクに酒をのませた。

「小便をしっかりと出ればメクラなで、世の中は万事うまくいかんもんだナ、大ハツァン」

某夜、人なき彼の家の座敷でこういつて肩を落した。街筋一等の立派な家で、その宏壮な客間の一方には、家伝のヒナ人形という百体近い結構な三月ビナが、そびえたように高々としたひもろせんの上で目白押しになっているのが、ケンランというよりかえって妖奇であった。この人は、赤シャツより野だいこかもしれない、とそのときボクは考えたりした。

白くろうたけた美しい奥さんは、なぜか南葉さんのそばへはこれっぽちもよりつかない。南葉とこの奥さんの、抜き難い宿命観みたいなのが、のっけの日の初手に、ボクには痛いほど感じられた。

そうして数日後、町中をボクが歩いていたら、向うからフワフワと彼が現れた。（ボクはいつも彼を風船玉と呼んでいた）

「よう、これはこれは大ハツァン」

さもうれしそうにそう声をたてた彼は、細長いこおろぎのような片手をあげて、ボクをその内懐ろ

へかき込むようなあんばいで手招きした。

「ちよっと、行こう」

いつものデンで、彼は相手のことをちよっとも考えない。世の中の人間はすべて彼のために、あたかも存在することく、にだ。気がつくともボクは近くのウナギ屋の小座敷にいた。

「女房のすねたは足をナツのよう、か、チエツ、勝手にしやがれさ」

陽はまだ高い。戸迷ったような顔でカッポ服のまま仲居が運んできた酒に、そういつた彼は、妙にウキウキとして

「酔うて砂上に臥す、君とがむることなかれサ、今日はご盛大にやろう」

と、大島の羽織をスルリと落語家のように抜きすてた。だが、真昼の酒席は、わずか三十分で終わった。ふいに、彼はまだ一本の酒もあけないうちに帰るといい出したからである。

「すまないねえ、大ハツァン」

ショボ、ショボとしたしめった眼を、眼鏡の底で絞くまたたかせて彼はいう。

それから一カ月はどたつて、町中で綺麗に盛装した親娘づれ二人にあった。みると母親の方は南葉夫人である。

声をこちらがかけるまでもなく、スーッとすさまじい風のように近

よってきた夫人は

「その節は……」

と深々と頭を下げる。はて、と思

いながらも

「こちこそ、ところで南葉さん

は……」

お元氣ですか、とのど首まで出

川柳に關係の



ある話

大野風柳

われわれが漫才師を評して「観客にあわせて話の内容を変えてゆくからうまい」とよく言う。つまり観客がどんなところで笑うか、すばやく察知して、観客の質を打診する。そしてそれにあわせて対話を交えてゆくのが、うまい漫才師と言われている。客を笑わせるコツがここにあるのだと私もそう思っていた。ところが四、五年程前、芸能新聞に当時喜劇俳優の益田キートンが、この笑わせるテクニクを否定していた。キートン

の言葉はもつと原作者を尊重すべきだと言う結論になるのだが、いわゆる原作者は喜劇ならば笑わせるように作り、織りこまれていくのだからこれを勝手に演技者で

かかったボクへ、夫人はいんげん極まる所作のあと、冷たいまでの口調でこういった。

「おかげで初七日は今日無事にすみました。ご回葬のお礼も行き届きませす……」

あるものが変えてその場に合わせるのとは絶対にいけない。原作者は観客をすでにのんでかかっているのだというのである。当時これを読んで私は、これは大切なことだといろいろの点で反省させられもした。はたせるかな、益田キートンは哀愁のある芸のこまかい芸人として、今やテレビに映画に大活躍である。笑わせること——それは悲しませることも通ずるとしみじみと考えさせられた。

○
いつも各誌で雑詠とか、題詠とか、問題にされている。題詠の場合、あくまでも題に忠実であるべきである。たとえ雑詠至上主義が叫ばれようと、題詠というワッ

の中で作られる場合はそうはゆかない。中に「題を切りはなしても判る句」とか、「雑詠として見ても良いものでなければ抜けない」などと言う人がもしもおったら、それこそ大変である。

四年程前だったが、東京の句会で「小鳥」という特選の句に

小鳥屋で九官鳥に虚を衝かれ

美江
があった。これを見たとき腹立たしきをおぼえたのである。それは、この句がもしも雑詠として作られ、又「九官鳥」という題詠であつたならば、私は褒賞の言葉をおくたに違いないが、「小鳥」という題詠の場合、考えてみなければならぬと思った。小鳥屋という言葉があるから「小鳥」に入れたのか、又、九官鳥を小鳥と見たのかは知らないが、とにかくこの作品は、おどけた九官鳥に虚をつかれたときを詠ったものである。

○
題詠を詠みこなすことも大切に違いないが、それは題詠というワッ

と、自由美術家協会の画家と盃をかむ機会を得た。話題は主として「川柳」と「絵画」に絞られはしたが、その席上、曾我東平氏（小生の会社の人で美術評論を得

作品は人間である

(豆秋句抄を味わって)



・森 下 冬 青・

文通したこともなければ、勿論会ったこともない、その須崎豆秋氏の作品についてすこし書いてみようと思ったのは、川柳雑誌から毎月機関誌を頂戴しているから常に豆秋氏の作品にせっしていて、見る度に作品の座から温かさ、懐かしさがわいてならなかったで何か書いてみる気になった。氏を評して

私は最初に、豆秋氏と書いていたら、つい豆秋さんと、こうペンが走った。これは、作品がそうさせるものがあるからでもある。出勤へヒヨコがすこしついで来る

お出勤の豆秋さんのあとを追って、ヒヨコは、ちょこちょこと歩いた。生れて余り間のないヒヨコ、

「ああくたびれた」
てな顔をしているヒヨコを眺め、微笑をもらす、豆秋さんが瞳に浮かんでくる。

恐い風だったと雀しゃべり
合い
この作にしても、雀を愛しいとおもい、雀へ人間的な情をもち、「しゃべり合い」とは、いかにも童話的な手法がたのしい。ところが、

けなげにも家主の犬を噛んで来た

私は、じつと豆秋さんの写真を眺め、この人のどこから腹立ちがでてくるのか、濃厚な顔を見てそう思った。だが然し、それは無理な注文で、人間なるが故に、腹立つのは当り前である。「けなげにも」と軍配を上げているここに家主と、店子が、からんでいる。

看板の裏で茄子の花が咲き
先の三作は動物だが、これは植物である。茄子の可愛い花への慈愛の眼、作者のヒューマニティーがよく観える。

秋風の中で食に押まれる
この寒々とした人間の悲しさ、哀れさ、乞食は押むことに馴れあっているも、押まれている己はどうかであるのか、押まれてしおしおと秋風の中を行く人間像は誰れであろう、豆秋さんその人には間違いないだろう。

火葬場は火をつけてから夕涼み
夕涼みの作品なんか、むかしから数え切れない程ある。だが、火葬場は、火をつけてから、とは、これはなんと縁起の悪いものを種材にしたものだ、同時に有為転変の人生社会に、どしんと胡坐をかいている土根性は見上げたものだ。

暮れてゆく如き往生したいもの

往生したいもの、どこか、火葬場の作品において、すでに往生している。普通一般に、「往生」とは、大雪のために列車が立ち往生したとかで、非常に困ったときに使われる。又、人間が死ぬ時に、往生とか、大往生とかを使う。仏教をすこし知っている私は聞き及ぶに、「往生」とは、往生生れるであって、何かの壁を破ったときが往生である。この作品なんか、色紙や、短冊に書いても、もう一方が、おそらく喜ばない、それはど死に関係することはない、それはど死にまつまにされる。だが、この火葬場の作品の底に流れているものは、苦の壁を破ったところの悟りがあって好きな作品である。

ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる
只単に、風景的な内容でありながら、ドロ、ドロ、と現れているのにフットおかしくなる。本当は、貧民窟へ陽が落ちるなんて、あんまり明るい感じがせない、なのにドロドロの上下が、暗さをひっくりかえしているのも、豆秋さんの独壇場であろう。
二、三の若い川柳作家が、先輩連中に理論が無いと言う、これはもっともな話で、よく解る。それにしても、先輩連中に理論が無いということよりか、まず大いに理

意とするが、僕の

ねずみ三匹三角形を保ちつ

スピッツの目と目と鼻を結びたし

の作品を激賞してくれた。それから三角形の美ということに話が展開したが、曾我氏は「シンガポールが陥落したとき、山下將軍にもう少しのセンスがあったならばよかった。つまり、イエースか？ノーか？の二つだけではいけない。もう一つ、どうか？があつたならば、この三角形の芸術に入れたやれたのに」となげいていた。これは面白いと思ひ、その日第一の収獲として帰った。

○

私の住んでいる新津市には、これと言った名物が無い。それは信越、磐越、奥越本線の交叉点の町だけに、鉄道でもって来た為かも知れない。今は合併で人口も六万近くになったが、その以前は、人口の三分の一が鉄道員で、あとは農家が三分の一、市街地が三分の一と言われた程だった。

名物の少ないその中で「新津松坂」という民謡だけは、大いに自慢してよいものだと思つている。毎年、お盆近くなると新津市長をはじめとして、市内有名人を加えて、黒紋付きを着て、シマの角帯に扇子をはさみ、編み笠に顔して浪人スタイルで町を流し踊る。

論を吐いたり書いたりすること
を若い人はやるべきである。先輩作
品の吊り上げでもよい、詩論でも
芸術論でもよい、只、理論は作品
向上のためであると信じている私
は、作品向上のための理論でな
く、川柳作家と自負するならば作
品向上とは遠い理論のお遊びで
あっては困る、と若い人達に言っ
たことがある。

須崎豆秋さんは、私の知ってい
る限りにおいて、理論を川柳誌に
書いて余りいらなかったと思
う。でも豆秋作品が今日の川柳作
家へ無言に教えていられる。で理
論を書く人、理論を吐く人、理論

を云わない人、人それぞれの個性
であって要は、川柳作家の自負を
主点でなければ私はいけないと考
えている。

また、川柳作家として一家をな
すべきである。というなら一体全
国でどれだけ一家をなす方が居ら
れるか私には解らない。然しなが
ら、須崎豆秋さんこそ一家をなさ
た方であって、作品から、にじみ
出るところの豆秋さんの人間が浮
彫りになっている。作品において
嘘がない、おどかしがない、それ
に風呂上りのように、人生社会の
汗とアカを落した、さっぱりした
ものも感得できる。波瀾万丈の小

林一茶の六十五年間の生涯と、私
は知らないけど、須崎豆秋さんの
六十九年間の生涯は、やや似てい
るものであるにしても、同じでは
決してない筈だ。

結局、作品から読者の胸をノッ
クするものは、温かき、懐かしさ
が一茶作品と豆秋作品に相い通う
ものがあって、一茶の作品と豆秋
さんの作品が握手していう。



豆秋さんは 立派な詩人だった

小野 十三郎

豆秋さんが長らく御病氣だった
ことは存じておりましたが、こん

私がよくおぼえている句が意外に
たくさんございます。

どの雑誌を見まして、お亡くなり
になったことを知り、生前に御見
舞いにも上らず、告別式にも参列
できませんでしたことを、大へん
悲しく思います。

それはともかくとしまして、豆
秋さんがま近に迫る死を前にし
て、川柳の阿倍野支部の方に書き
したためられた遺書には心を打た
れました。

川柳には不案内な私も、庶民の
詩人として豆秋さんには、かねて
から深い親しみを感じ、敬愛して
おりました。こんど雑誌に再掲さ
れました豆秋さんの句の中にも、

私なども、詩というものは、そ
れでもって他に訴えるというより
は、自分の日常の物の考え方、感
じ方を徐々に鍛え昇めてゆく習慣
のようなものだとの心得で、詩
く。

品を味合いこれだけ文を私はつづ
つてみたのである。
夕焼けまつ赤かあぜ豆こほ
れねむる

★ ★ ああ豆秋さん

追悼句

川柳阿倍野支部

合掌

病院も医者も信じて死んでゆ

惜しまれて散る豆秋の葉が茂

り 小松園

ふるさとを残してとおい遠い

旅 梅里

極楽で待つと豆秋先きに発ち

旅 十悟

旅立ちの句帳もしくは頭陀袋

さよならを吃つて後を頼まれ

し 塚子

ユイモアを棺に一杯つめて発

ち 葉光

遺言のかわり「ふるさと」残

し 喜仙

先生は今もページに生きてい

る 生童

帽子を脱げば豆秋さんのこと

想う 若芽

川柳の鬼一目散に馳けだした

曼珠沙華豆秋さんの墓かざれ

賑やかに通夜してやと遺書

かなし 見 一三夫

る。日本三大流しの一つと宣伝し
ているだけに、その婉婉たる列は
見事なものである。川上三太郎氏
と、俳句の石塚友二氏が、この流
麗の踊りを見て「虚無僧の踊りの
風格がある」と言を二にしたのも
面白い。三百八十年前の天正年間
に当時の領主だった上杉家の客將
新津勝資が使いを伊勢松坂にやつ
て習わせたとか、あるいは伊勢松
坂の浪人が新津に土着して伝えた
とかいろいろの説がある。

もう一つ名物とも言うべきもの
に「菊花展」がある。この方も昔
からの伝統があり、種々改良され
て来ているが、最近「新津松坂
坂」という菊の花さえあらわれて
来た。その菊の先生で、小林徹雄
氏（短歌の方では潮音同人になっ
ている）が私の家の近くに住んで
おられるが、先日「川柳と菊」に
ついて語り合ったとき、小林氏が
「菊の花びらは花の頂点に向って
いなければならぬ」という、昔か
らの鉄則に疑問を持ったのは、菊
をはじめて間もない頃でした。そ
して書物を漁り、先輩に尋ねても
納得出来る解答は得られませんでした
が、ようやく最近になって判
りましたよ。本当に簡単なこと
で、それが菊の生命だったという
事に気がつかなかったまででし
た」と言われた。本当にそうなん
だと私も心の中で得るところがあ
った。



川柳と宗教

— 豆秋さんをしのぶ —

戸田古方

豆秋さんのなくなられたことを本社から知らせていただいたのは五月四日のひるすぎでした。

雨がしとしと降っていました。時々はしとどろいた雨にもなっていました。

三時、おくやみに出かけました。

豆秋さんの旭町へ入る南の入口にはだいが前からゴルフの練習場になっていますが、それができてから豆秋さんのおうちへ行くのは今日がはじめてでした。

目印になるこの辺には珍らしいアカシヤの並木は以前の通りありましたので、見当をつけて入ってゆくと、崖の上に葬儀屋の車がとまっていたので、おうちへの降り口はすぐ見つかりました。

昔のままの二間の入口の方の部屋はいろいろなものが積み重ねてありましたが、その間をわけて上らしていただきました。

今納棺の最中でした。

奥の間の豆秋さんは二人の葬式屋だけにまかされて、棺の中へ入

ろうとしていられるのです。軽々と抱き上げられる前に、手甲、脚

伴に経かたびら、型通りの手順ではこばれてゆきます。装束をつけ終った豆秋さんはせまい長方形のハコの中へ入ってしまわれまし

た。いつか、どうかで、豆秋さんがこんな格好でみんなを笑わせたような気がするのです。

わちははにめぐりあいたや靴みがくという句を思いだしたのかもれません。

しかし、達者な日の豆秋さんの和やかな顔ではありません。ひたひたのおつもいともとはちがって見えたので、この場にきても、豆秋さんの死にあったという悲しみが、私のものになってこないのです。

忘れたころにしのびよる悲しみというのでしょうか、今、六月号の川柳誌を手にしてはじめて、豆秋さんはもういないんだと思いはじめています。豆秋さんの思

い出を読んでいますと、一カ月前の納棺がはっきり映像になってくるのです。

暮れてゆく如き往生したいもの

たえまなくせまりくる病苦との闘いの中でせめて最後の瞬間に希望をつないでいられたのかとも思われてくるのでした。

私はうっかり、この句を「暮れてゆく如く往生したいもの」とかきかけてハツとしました。「く」ならば副詞、「き」は形容詞です。せめては日頃から念願の静かな死をとの憶いは「暮れてゆく如き往生」とまとまっていただけで

す。副詞として「暮れて行く如く」が「往生したい」にかかりますとは是非でもというふうまさんが出てくるのですがこの句にはそんな

心配がミジンも感ぜられないのです。出来ねばそれも致し方なしが豆秋さんでした。

豆秋さんを棺に納めたあとお寝間の頭のあたるところにベットリぬれあともありました。多量にお薬をもどされたとのことでありま

す。奥さんのまどろんでいられる間に落入れられたということですが、声一つたてず逝ってしまった

たとはいえ、誰にも訴えられない苦しみを、ただひとり苦しめたのではなかったかと思われもしました。

私はこの句がいよいよ豆秋さん

の句であつたなと思えてくるので

す。

おくやみに伺って、ここが豆秋居であると思つた瞬間、思い出されたのは、私が被災にあつたすぐあと、川柳雑誌のバックナンバーを借りによせていただいた日のことでした。「そら淋しいでし

う、そら淋しいでしよう」とくりかえしながら、落書をすっかり灰にしてしまった私をなぐさめて下さって、おうちにあるだけの川柳誌を貸して下さいました。

豆秋さんのところは幸い焼けませんでしたでしたが防空壕に入れておられた本がすっかり湿気を帯びて、中にはみるかげもない姿になっていたのもありました。

私はその中に、くしゃくしゃになりながら「不惜身命——山本有三」の背文字を読みとることが出来ました。

不惜身命、豆秋さんの魂にずっと宿りつづけていた言葉じゃなかったのでしょうか。

骨立てたまま二次会へついで行き

豆秋さんは自分のみにくさをはにかみながらこんな句にしていら

れるのです。

豆秋さんは句を通して溺れる自分を救い上げようとしてられたのでした。

阿呆なこと言うてしもうて淋しけれ

豪雨禍を

見舞う

近畿・中部・四国の皆さんへ
エライ雨で、アツチでも、コッチでも被害が続出している。新聞やラジオで被害を知ったびにその地方の読者諸君のご家庭が、ご無事であるように祈っている。

毎年のようにやって来る台風や集中豪雨の暴力に、科学の力も、デモの力も何等効果がないとは、あわれ憫然たる人間ではある。

静かに、祈るばかりである。

編集局にて
麻生路郎

スマートで
着心地良い

GOLDEN

O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

みの虫のなんぼ飼うても壁
だった

豆秋さんの楽天性は川柳の賜物
でなかったかと思われず。

恐ろしい風だったと雀しやべ
り合い

今晩は台風だとさコスモス
よ

機関車も一人で走って見た
ころう

かぎりなくやさしい豆秋さん
をお子さんがなかったからという
以上にこんな動物への愛情の句を通
してうかがえます。川柳の一茶と
豆秋さんはよくいわれてこられま
したが、句の上だけでなく豆秋さ
んの一生も一茶に似ていたのだな
いかと思われもしました。

豆秋伝はまだくしくは存じま
せん。苦勞人であったことだけは
句を通して充分知らせていただい
ております。

愛犬ボス
けなげにも家主の犬を噛ん
で来た

豆秋さんの一面です。
豆秋さんも、若い時、前むきの
人生を夢みていられたのでしょ
うが、せまりくるきびしい人生の
中で、うしろむき、よこむきと、工
夫を試みられたにちがいありませ
ん。そしてそのうちに川柳にめぐ
りあわれたのでしょう。そして、
川柳を通して、前むき以上の前む
き、八方を包むおおらかな田満の
境地を自分のものにいられたので

した。(以下次号)

得難き人

——豆秋さんを悼む

武部 香林

豆秋さんが逝ってしまった

最後まで川雑誌上に御投句を見た
事は、私の胸を打たずにはおかな
い。川柳に徹した氏の風貌と川柳
への情熱は汲めどもつきぬ人間豆
秋の真髓の躍如として洵に得難き
人である。

近詠に流れる一抹の不安を感じ
てはいたが一途に快方のみ折っ
ていた私には、思いがけない計報
に對して言うべき言葉も無かつ
た。最近家にある屏風へ色紙や短
冊を貼り交せてその句主と話して
いる如く楽しんでるが私が大阪
を去る二日前のパーティーで豆秋
さんが書いて下さった短冊も貼っ
てある。

袂れるといつても岡山ついで
隣 豆秋

あの日の印象もまだ新たに永遠
のお秋の句となった事は限りな
く淋しい。

豆秋さんの秀吟名句は既に推奨
をほしきままにされているからこ
こでは割愛するが、いわゆる淡々
たる豆秋調は常人の追隨を許さぬ
ものであり、飄々たる中の滲み
出る人間味、深刻さの中に細やか
な情味とユーモアが流れ、巧ま

ざる技巧と相俟って実に豆秋さん
が道を譲らねばならなかった。

一口に言って善良な庶民の代表
である豆秋さん、路郎門第一級の
川柳詩人豆秋さん。氏の作品に魅
せられた者は川雑系の人々のみで
はない他社の人達からも大きく評
価されて来た、氏の還暦祝賀記念
句会には流派を超えた盛況を見た
事でも明らかにそれを物語ってい
る。

ときにやや感情の多い点があ
っても、それだけに友情の深さを
示した人だったとも云えよう。他
人の佳句を句会まで持ち込んで発
表し心から味わうという態度など
真に川柳の中に生きた人である。

豆秋さんに優れた作品の多いと
いう事は、深い川柳眼と純真な詩
的精神の濃過紙を通した、現象の
奥なる真実を掘り上げ非凡な技巧
によって達成されているのだと思
う。生れた着想を一気に作品とし
て仕上げてしまう腕の良さ、もの
にならねば惜しげもなく素材は捨
ててゆくといわれるのも自信があ
ればこそで私など中々真似られな
い。

阿倍野句会へは私も随分通っ
た。豆秋さんは句会を全身で楽し
んでいられた。出席者に対する一語
一語にもそれが現われていた。

「体操のかわりに蒲団たたむな
り」の私の句に對して豆秋さんか
ら「なる程今まで嫌々蒲団を畳ん

でいたが香林さんの句を見てか
ら、毎日ヨイショヨイショと元氣
にたたんでいます」とのお便りが
あり、すべてが川柳されている姿
であった。去る四月十六日大阪か
ら来られた、すむ、薫風子、舟
遊の三氏と拙宅での寄せ書を差上
げたが、早速御返事を頂だき、御
病気の危機迫るを知らなかった。

哀しい哉これが絶筆となり洵に惜
みても余りありというべきか。

屏風の中の友達が一人減り
香林 謹悼

豆秋さん

勉強します

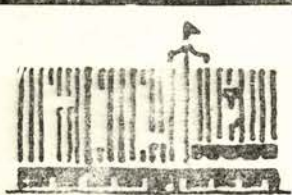
山川 阿茶

四月十日付で気分がいい時に短
冊の稽古をしています。下手で恥し
いですが、別便で
送りましたから御
笑納下さい。大方
川柳本年度は第一
回からベストテン
にお這入りになっ
て「ゲン」がよろ
しい、大いに頑張
って下さい、と云
うお手紙が来て
秋風の中で乞

食に拝まれる
口髭を生やして猫の仔が生
れ

を送って下さった。お礼からお
見舞いに伺うつもりで梅里さんに
道順を伺った所、私も一度見舞に
行きたいと思っっていますからお供
しますと御一緒して下さい。四
月十六日にお訪ねしたら大変お元
気で川柳の話やらトレーニングに
デパートへ行って来た事。床脇で
坊さんがお経をよんでいるのに眼
をさまし枕経をあげているのかい
な、わしはまだ息をしるのにお
かしいと思ひ考えてみれば娘さん
の命日だったと、豆秋さんらしい
お話を伺って帰宅した。十七日付
で京都八坂の塔の夜景のエハガキ
の札状が来たがこれが最後であ
った。

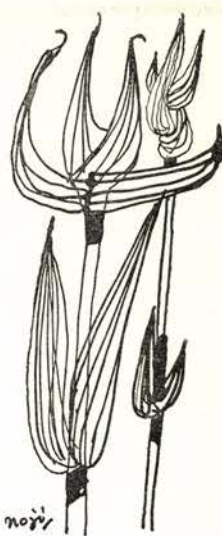
惜しい人を失ったものである。
ファンレター極楽へ迄とど
きそう 阿茶



お買物は
お気軽に
楽しく『そごう』で



行脚と汗



後藤梅志

行脚の掟

昔は行脚というものが出来たから、世間のいろいろなものを知ることが出来た。物見遊山ではない、人情や、つまり人の情けや有難さや憂さつらさ、自然のうつり変り、雨や風の姿というもので、つぶさに味わうことができた。恐らく舌に來る飯の味もちがったであろうと思う。

人の一生が、旅をするのと同じだといふところから、路郎者の「旅人」(たびびとも)でできた聞く、そのくらい味のある「旅」といふものが、簡単に出来るようになった近代文化というものは、呪詛すべきものであるかも知れない。

人間というものは、元來きたないものである。そして移り気なものである。暑くなれば寒い冬が恋しくなるし、妻をもてばよその女

の酌で一杯呑むことに興味を覚えるというように、移り気で、我儘にできている。これは一つは世間がそう仕向けるからで、人間のわる知恵の結果である。

俳人の芭蕉はよく旅をした。そして「行脚の掟」といふものを作っていた。時代を異にした昔のことだから、總てを味いつくせる訳のものでもないが、今の世の中に当てはめ、人の信条にも似て深いものがあるのは、さすがに芭蕉である。少々長いが、辛抱して味って頂きたい。

行脚の掟

一宿なすとも、故なきに再宿すべからず、樹下石上に臥すとも、暖めたるむしろと思ふべし。腰に寸鉄たりとも帶すべからず、總て物の命をとること勿れ。君父の讐ある処には門外にも遊ぶべからず、俱に天をいただかさ

る忍びざる情あればなり。衣類器財、相応にすべし、過ぎたるはよからず足らざるも然らず、程あるべし。

魚鳥獸の肉を好んで喰ふべからず、美食珍味にふける人は他事に触れやすきものなり。菜根を咬んで百事をなすべき語を思ふべし。人の求めなきに己が句を出すべからず、望を背くも然らず、問はざるに説くは説くにあらざ、問に答へざるはよろしからず。

たとへ峻阻の境たりとも、所勞の念を起すべからず落らば中途より歸るべし。

馬、駕籠に乗ることなかれ、一枚の枯杖を己が瘦脚と思ふべし。好んで酒を飲むべからず、饗応により固辭しがたくとも微醺にして止むべし、乱に及ばずの禁あり。祝歳の戒祭にもろみを用ふるも酔を憎めばなり。酒に遠ざかるの訓あり、慎むべき事なり。

船錢、茶代を忘るべからず。他の短を挙げて、己が長を顯すことなかれ。人を誹つて己に誇るは甚だいやし。

俳諧の外、雑話すべからず、雑話出づれば居眠りして勞を養ふべし。

女性の俳友と親しむべからず、師にも弟子にもいらぬことなり、此道に親炙せば人をもて伝ふべし、總て男女の道は嗣を立つるのみなり、流蕩すれば心教一ならず、此道は主一無適にしてなす。能く

己を省るべし。

主ある物は一枝一草たりとも取るべからず、山川江沢にも主あり、つとめよや。

山川旧跡したしく尋ね入るべし。新たに私の名の付くこと勿れ。

一字の師恩たりとも忘るることなかれ、一句の理をだに解せず、人の師となることなかれ、人に教ふるは己を成して後の事なり。

一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず、きりやとて又媚語ふことなかれ、斯のごときの人世の奴なり、此道に入る者は此道の人に交るべし。

夕を思ひ旦を思ふべし、旦暮の行脚といふ事は好まざる事なり。人に勞を懸くることなかれ、しばしばすれば疎んぜらるるの言を思ふべし。はた施食たりとも好むべからず。

——伝、芭蕉——

必ずしも行脚の心得とのみ思われぬことまで、こまごまと箇条書に、こくめいに書留めたことは、當時の行脚といふものが、複雑な環境をもつと共に、芭蕉が既に一家をなし、一挙一動、一言一句もおろそかにできなかったことが窺われる。

全、十八項のうち、面白いと思われることは、女性の俳友と親しむべからず、という一項で、女性というものはうっかりするとつけ入られるし、こっちも出来心が出

そうなどころを警戒したものと思われるが、俳聖といわれる芭蕉も、女というものは厄介なものだと、一度は手を焼いたこともありそうに思えて、面白い。

俳諧の外、雑話すべからず、雑話出づれば居眠りをすべし、というのもおもしろい。仲々芭蕉は人を喰ったところもあり、寛政よろしきを得て、今ま時の政治家などより締りがあったように思えて、心強よい。

汗

芭蕉は三月の二十七日(元祿二年)。深川の草庵を出て、約百六十日もかかって、六百里あまりの奥羽、北陸の旅をした。所謂、奥の細道行である。一日四里あまりの道を行った勘定だが、毎日八里、十里の道を、老驥に鞭打って歩いた。時には、馬に乗ったこともある。恰度日光山を下りてから、奥羽へ向う途中、河合曾良と共に那須野の原へ差し掛った。大粒な雨が恐ろしい勢いで降って来てびしょ濡れになってしまった。黒羽という所まで行くのに十里余り、名だたる那須野の原は草も深く、道は迷路にも似て、判断もつき難く、途方に暮れたが、やがて雨も上り、ふと見ると、一人の草刈男が居たので道を尋ねると、「それは如何にもお困りだろう、那須野の道はどこも十文字に道がついていて踏み違えると飛んでも

ない所へ出てしまう。とても旅人に分る道ではない。この馬を貸して上げるから乗って行くがよい、道は馬が知っている」との事である。馬が止まったところで、馬を返す約束で乗ったが、馬は農夫の云った通り、二人の旅人を乗せ、目的地まで難なくふたりを案内してくれた。芭蕉はとても感激して、一握りの小銭を馬の鞍に結びつけて駄賃にした。馬は若干かの駄賃を荷にして、ポッカポッカ、元きた道を帰って行ったという話である。

こんな話は西洋の歴史にもあまりあるまいと思うが、こういう法律も何もいらない社会が、一度来て欲しいと思った。

現代人は、汗もかかずに、賃銀や収入を上げることがばかりにかかっているようだが。汗というものは、有効にかいて欲しいものだ。前の話も、のんびりした話で、汗という文字は一つもないが、粒々辛苦している、尊い汗というものを感ずる。

私は近年、ヒドイ汗かきだが、夏になり、じっとしていても出る汗が、正座して話をうたっている時は出ない。他人は不思議に思うが、胴のまわりがシッポリするぐらいで、可成り重労働だが顔や腕には汗が出ない。その代り失敗する汗は、焦ったり、急いだりする汗は、どうも賃銀の対照にはなりそうもないのである。

尤も、近年非常に人の数がふえた。思うだけに、暑苦しい話だが、これも文化の、一つの宿命である。

ある一と夏

私は一と夏、汗をかかないで過ごしたことがある。二十五六才の頃だから、もう四十年も前の話だが、これはべつにベッドに膝かされていた訳でもなく、達者にピンピンしていた時の話だからほんとかいなどと思われても仕方がないが、これは経験談である。

私は先日、本社句会のある上本町八丁目の関西会館へ行って、オヤと思った。あそこには、むかしは道がなかった。私の家はその頃、天王寺細工谷町にあり、あの関西会館のところをまっすぐ東へ行けば、二三四丁でなつかしい我が家の跡である。その谷底のような区域に貧しい私の家があった。恰度結婚したてで、この夏は「汗をかかずに送ってみよう」と思っていたのは結婚記念のつもりであったのかも知れない。

恰度その頃、デニスが盛んで、私はひるはデニス。よるは謡と夢中になっていた時代で、元来汗かきの私は、ボトボトになるほど汗をかいたものだ。ソロバンを一つ間違えたとジワッと汗が出る。アッ電車が来たと思って小走りに走って、乗ったと思うと汗が出る。一寸忙がしくなると汗が出る。

る。商売は株屋さんで、元米忙がしい。こう汗が出てはたまらぬ。なんとかい工夫はないかと思っただのが、動機だった。

その頃「暑いなあ」というと五銭ずつとられたことがあった。お客が来て「あつうまん」というと、さあ五銭と手を出す。お客は狐につままれたような顔をするが、わけを話すと次々ながら五銭出す。私はその会計係をやっていたが面白いほど金が蓄った。すると金を取ることが面白くなった。落語じゃないが、あいつはお饅舌べりだからと、面白半分言わせたこともあった。男はよく引掛かったが、女の方は用心深くて、かからない。汗をかいていても、仲々暑いと言わない女は、よほど性悪な、狐の生れ代りのような気がした。

さて汗というものは、座ると、不思議に引込む。これは生理的に原因があるのかも知れないが、奇妙である。洋服を着るようになって座ることも妙くなったが、これは日本人の習性上、損をしていることになる。小説家は、いい作品を書くと思うときは、大抵座って机に向うそうだ。座ると脳の回転がちがってくる。これは実験上、小説家はそう悟ったのであろうが、さすが一枚ずつの原稿紙にいのちを托す小説家としては、そうもありそうなことだ。

青々とした日本の庭園を見て、外国人は日本の文化はここに在り

と、ワンダフルを叫ぶ。春夏秋冬、われわれは、自分の家の小さな庭からも、暑いにつけ、寒いにつけ、何かしら恵沢をうけている。戸外に目を放つとき、吾々は苦を忘れる。海の碧さ、山の高さ、雲の行きかい、とくに五月の鯉のぼりなどは、だれが発明したか、目を楽ませてくれる。こうなるとアドバルンなどというものは、グロテスクなもののだ。とにかく外へ目を向けると、汗は引込むものらしい。

私が、一と夏汗をかかなかったコッは、外でもない慌てない、ということであつた。

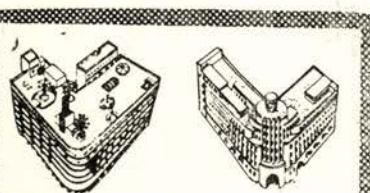
家にいる時は、足袋をはいた。差しつかえない限り和服にした。和服の時は、うすい腰巻をまとった。勿論、足袋は履いている。下駄は、軽いものを選んで。電車では、人の居ない所へ立つ。腰掛けへは、なるべく掛けないようにした。混んでいる電車では、揺れるに任かせ、押されれば、押され、揺り返せば、揺り返して揺れる。これはやって見るとなかなか面白い。恰度、釣鐘が、ぶらんぶらんして

いるように、無抵抗である。勿論、足を踏まれても、知らん顔をしている。まず、ざっとこんな工合で、無抵抗主義で、一と夏を過ごした。不思議や、汗はかかなかった。もっとも、のんびりした時代ではあった。

汗というのは、感情を浪費すると出るものだ。ジャンジャン汗を流すのも、楽しいものだが、こんな変った行状をして、一と夏を過ごして見るのも面白い。自分というものを試すつもりで、一つやって見てはどうだろう。

芭蕉の「奥の細道」をめぐって、明治、大正、昭和と現代俳人の調べ上げた、芭蕉に関する古文書と、その研究努力は、大いしたものだが、この「行脚の掟」などは、貴重な遺産の一つ。味わうとは連想のとりことなり、どうかすると脇の下が涼風の吹き上がる、心地がする。

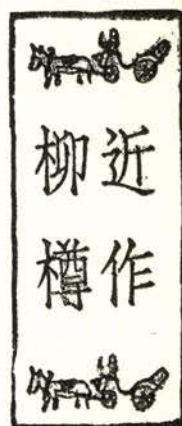
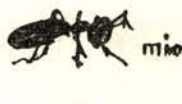
(終)



「お買物」
は近鉄で!!



アベノ 上六
近鉄
アベノ 77-8331
上六 77-8331



麻生路郎選
北川春巢選

若後家を立てねばならぬ田地なり

兵庫縣

辻 文平

荒波に負けじと白髪抜いて見る

同

すらすらと出るお梅みの冷たさよ

同

所得倍増内職をやりながら

同

荒れてても案外温い妻の手よ

同

足袋干すに庭の枝振りえらばれる

同

幼稚園母も通っている気持

鳥取縣

鈴木村諷子

ブローチの下は牝豹の心かも

同

良心というくせものが邪魔をして

同

鶏一羽死んで一升飲んじまい

同

分校でオルガン山も田もみどり

同

座談会遊ぶ話でけりがつき

西宮市

樋口 寿栄

バラの香を部屋一ぱいに孤独なり

同

冷蔵庫バター一切れという生計

同

趣味に追われてレジャーの忙しさ

同

着る物が出来て恋人まだ出来ず

同

みな金が動かすビルの人の群

福岡市

田口 麦彦

キヤッチフレーズばくの財布を軽くする

同

日本の行方社説も空廻り

同

ひとり身に重たいものに醬油瓶

同

けだものになれぬ^{わたくし}の意気地なし

同

明石方面バス旅行にて

四句

ソロバンの町が電子の世に栄え

兵庫縣

河原みのる

柳さえ植えりや明石も銀座なり

同

ブラネタリウム首の運動させてくれ

同

ボロクソに橋かかりそな淡路島

同

にぎらせた効き目女中のいい返事

竹原市

山内 静水

クラス会 二句

お鮎子のサイダーいつしかほっ^とかれ

同

土に生く恩師のお手の荒れ給う

同

損な役結局お人好しが受け

同

矢車草もらう袂が露に濡れ

津和野市

内藤ささ子

イチゴミルク十九の春の頃の味

同

豪農の土間の暗さへ嫁ぎゆき

同



断食で闘った

糖尿病(2)

吉田圭井堂

予備断食でその翌日から愈々水
だけしか飲めぬ本断食が向う二
週間なり三週間なりが行われる訳
で本断食が無事に終ると、おもゆ
から次第に量を増やして普通食に
なって退寮するのである。本断食
二週間でも一カ月は充分にかかり
ます。

手術をして苦しむ病人でもなく
一カ月以上も毎日寝て暮すのだから、
退屈するのは当然ですので、
此の間に柳人先輩をびっくりさす
ような名句を生み出そうと、川維
も四十冊以上持って行きこれを読
破し、すくなくも一日十句以上、
ものにする積りで出かけたのです
が、仲々どうして初め三四日は、
漸減年ら食事があつたので雑誌も
読み、課題吟も作れましたが、次
第に手はわななき、声はふるえ、
仰向けに寝てメモと鉛筆は両手に
持っておれど、句も浮はねば雑誌
を取り上げる気力もない。漸くに
出来た句をメモしておこうと思っ



大切な話してゐるに手洩かむ

同

おばあちゃんの浮気今度は橋フ

同

扇風機お待たせします風を向け 大阪市

木村 草々

花摘んでつんで童心にかえり

同

ショーウィンド妻に若さが残り

同

月賦すむ拍子に妻がまた孕み 愛媛県

大垣たもつ

古い古い古い頭が政治する

同

同権の女アザミのように見え

同

バイオリン親がすすめた音で鳴り 鈴鹿市

吉田 俊和

月賦なら買えるソロバン子がは

同

善人のやすい涙と思えども

同

子を旅に出し今頃は今頃は 大阪市

本村 文福

盛装の宴パパさんに子を預け

同

鼻唄にはたき合せた青葉風

同

何ぬかすと父は自分の非を認め 兵庫県

常岡 孝風

信仰の押売り挺子でも動かない

同

貧乏をしても明るい詩を愛し

同

ライターをいじって禁煙第三日 宮城県

平野 光道

メーデーに出ずに故郷さへ寝に帰

同

金儲けの話きかせて寄附出さず

同

刈りに来た草へ寝転ぶハミング 笠岡市

高木 桃里

ストをした看護婦の手で脈とられ

同

ソックスを汚すちび下駄よう捨て

同

麦の熟れこれから頑張る鎌を研ぐ 愛媛県

河本南牛史

駅長の飯がふいてゐる山の駅

同

うっかりと賞めたら花の苗をくれ

同

新築を訪えば茶の間で株が鳴り 竹原市

杉原 愛鳩

盗人呑み首は戸棚の中にあり

同

実家みやげ食べてしもうて礼出し

同

デボチンへ眼鏡をあげる歳になり 大阪市

谷町 互郎

新米のファイトを少し持て余し

同

眼鏡ごしジロリとにらむ老刑事

同

リバイバル・ブーム悪夢を掘り出し 日南市

杉本 一鶴

民謡をドドンパで唄うハイティーン

同

坪万になればなつたで手放さず

同

女房にも未だ嫁がせて五十面 青森県

木村 凉人

母の日にどうやと母に見舞われる

同

何時か逢う日を郵便友の会

同

病床で仲人役も相つとめ 市議会

坂東 若芽

野球なら犠牲バントで子を育て

同

でも、俯向く勇氣すら出ぬ只うとうとと寝ているでもなく、ぼーっとしているだけです。これでは不可んと雑誌を取り上げて川柳の字が柳川のど、ように見えたり「の」の字が鰻に見えたり、表紙の画が分厚いビフテキに見え、作句や読書どころではありません。

へ煩惱の鰻は追えども去らず菩提の川柳は焦れども作れず
全く鰻道に陥ちた浅ましい人間の姿です。

然しこれに引換え過去の追憶だけは整然と甦って来て、幼い頃の数々が実に我々ら名文となって出て来ます。若し私に力があつて優れた速記者を枕頭に侍べらせて口述を速記させたなら、相当読める自叙伝が出来たと思ふ程頭が冴えて来ます。それも本断食に這入って六七日目からで、本断食の初期は毎日毎日空腹と食欲の死闘です。

本断食が六七日も続けばもう消化液も出て来なくなつたが、今迄程の空腹感もなくなつてゐるものの矢張り見るもの聞くもの浅ましくも食べ物に直結します。断食寮開寮以来四十五年この間一人の死人も運び出さず、一組の色慾沙汰もないと寮主は自慢しますが、動物から糧食を奪つて色慾もありますまい。ところが臍腹は実に鋭く百五十米も向うの別棟で仕度している天ぶらの香り、かやく御飯

親馬鹿が三人寄って笑い声 鳥取市

近藤 昭夫

強風注意報が出ている中を宣伝

同

風邪で臥る^バを留守居にして出^カけ 滋賀県

土守 蜻蛉

時間待ちホームの女に点を付け 岡山市

行吉 輝次

社運隆々社長だんだん肥えてくる

同 山川 勝子

別居して当座の樂が苦に変わり

同

指言葉涙ぐましき夫婦愛 高知県

同 山川 勝子

就職の荷物の中の守り札 大阪市

山田 蛙水

綴方読んで父親酒量減り

同 小川 静観堂

止り木に汗を忘れるコップ酒

同

インスタント軽薄な世の合言葉 伊丹市

同 小川 静観堂

幸に猛雨となって田を休み 羽咋市

三宅 ろ亭

勿体ないが浩宮サマと比らべて見

同 須藤 俊江

金策を断る方が骨が折れ

同

歌のよに甘くはないとキスを知り 高知市

同 須藤 俊江

本意なくも値上げに協力させらる 出雲市

中川 晃男

子供の日母の日商魂たくましく

同 大久保 和二郎

金のない連休テレビの前で飲み

同

祝日に主義とずぼらが出さぬ旗 京都府

同 大久保 和二郎

ちっぽけなもめごと雲雀と見下ろれ 今治市

越智 義夫

ええ音で三時を鳴らす掛時計

同 片山 光福

儲からぬ麦ぐんぐんと今日も伸び

同

釣竿の音にも伝う春の音 八尾市

同 片山 光福

呼び捨てにする叔父^んを子は慕い 津市

嶋野ひろし

自動車のウィンクしてる曲り角

同 片山 光福

新刊に貸す順があり貸本屋

同

子の演出母の日に母うれし泣き 貝塚市

同 片山 光福

ジャンケンで来てつつま^いお焼香 大阪市

同 嶋野ひろし

フンフンと話半分で蠅叩き

同 片山 光福

押入れに寮母あきれるビール瓶

同

御詠歌をマイクに乗せて花の寺 松坂市

同 片山 光福

妻を子を愛し二号をも愛し 兵庫県

同 嶋野ひろし

青簾豆腐が白い膳の上

同 片山 光福

新聞を拡げてヒスを黙視する

同

踏切りで待つて電車ののろいこと 宇部市

同 片山 光福

電化したレジャーを妻は昼寝する 大阪府

同 嶋野ひろし

双葉からなどと出世をほめちぎり

同 片山 光福

検診を恐がる胸で酒が好き

同

よろめいてやると女房負けていず 香川県

同 片山 光福

の匂いも今日の献立は何かハッキリ判ります。又聴覚も鋭くなり、正面から五十米も這入っている寮の二階に寝ていても、夜大型の犬が道路をスタスタあるいている足音が聞えるから不思議です。視覚も勿論です。昔から受験は空腹時に限るとよく言われますが、全くその通りで暖衣飽食は緊張を欠くこと夥しいのは当然ですが反対に断食をやりつつ小説を書くとか詩や川柳を作るなんてことはおよそ凡人では出来ないものと思つて頂き度い。

つまり断食をすれば頭は断然冴えるが思考力や創作力は伴いません。故に私の壮図は空しく入寮中殆んど一句も出来ませんでした。退寮後漸くにして、

ライバルがあつて断食へこたれず

断食で貧に耐えてく自信つき

き

とこで肝心の私の病氣の方や身体の工合の方は入寮の日体重は十六貫五百ありましたが、愈々明日から本断食に這入る下し薬を飲まれた日には十五貫、本断食が終つて明日からおも湯にありつけると云う日には、実に十一貫九百。但し私は本断食十四日を自ら申出て十六日やりましたので特にやせたのかも判りませんが、四分の一以上のやせたでした。その後普通食迄に漸く四百匁を戻し、



叱られた昔肴に飲み騒ぎ	同	美しいとは流行を追うことか	玉島市	田辺	好女
宿下駄の気安き恥をかいてくる	玉野市	ハネムーン検札へ切符温う出し	松山市	中原	光雄
二階借り学士となって巣立ちする	同	ささやいている心算だろ。老夫婦	富田林市	浅川	八郎
福祉課に務め不幸に馴れてくる	愛媛県	親指を出せば失対ちと慌て	須崎市	高橋	蟠蛇
外遊も内遊もなく畑を打つ	同	ハンター。女性ブームにカメラ向け	神戸市	岩井	千甫
金ためる人かななかお茶が出ず	福井県	一瞬の値踏み鋭き美人の眼	守口市	樋口	一峯
錦かざるまで東京の四畳半	同	風呂賃も抜きうち値上げの低姿勢	茨木市	高木	繁太郎
へそくりで今日はおごとと妻強気	神戸市	冗談を云うてて恋は成就せず	大阪市	西本	保夫
おすわけのついでに噂も売りし	同	夢よもう一度白髪も気にならず	布施市	橋田	尚子
うつるものにうつして女髪を撫で	大阪市	ストもせず課長ぬけぬけ昇給し	笠岡市	松本	忠三
ダム乞食という言葉あり	同	披露宴こちらで仲人歌にする	玉島市	井上	旭峯
百姓の手から奪った鍬と鎌	津山市	弟の初の便りは元気です	愛媛県	藤原	君子
しほられたブロンズにはよく合合い	大阪市	ボスの意に逆うものは女だけ	神戸市	沢田	恵甫
孫抱いて人生観も丸うなり	岡山県	紡績を覗に来て女工に覗られて居	大阪市	指吸	拳児
子供の日今日もお花売る少女	布施市	移り気が又農具屋の口にのり	笠岡市	谷本	鈍愚坊
摘みすてて花の最後をきたながら	芦屋市	水車小屋春のいぶきの音を立て	大阪府	橋本	裕邦
レデース・フアストだから女は付け上り	ホノルル市	初月給友だちの袋ものぞいてみ	兵庫県	斉藤	たけお
犯罪史にあっばれ不朽の名を止め	堺市	ええ年をしてても女匂うて来	河内長野市	森本	黒天子
亡き人の秘事しめやかにささやかれ	泉大津市	本妻は盥二号は電洗機	神戸市	吉田	隆史
凡才の子を持ち寄附の発起人	西宮市	ママボリスだった痴漢の運の尽き	富崎市	野口	卯之助

十二貫三百匁で無事退寮しました。

さて病気の方は断食中糖の出ないのは当り前ですが、おも湯から次第に食量を増してゆくに從って、糖の方も増えて来ますのでがっかりして事務室の方へその由を申し出ました所「退寮後の注意事項」と書いたパンフレットを渡され、それを糖尿の項で読むと、断食後二カ月位は糖が出るが何日の間か全く出なくなると書いてありました。半信半疑の儘退寮しました所、なる程二カ月過ぎから全く糖が出なくなり、今日迄丸二カ年疲れを感じた時や大体定期的に三カ月位位に医師に検尿して貰っています。全然出ません。どうやら効果があったようです。

最後に断食なんてことは陽気浮気では出来るものではありません。余程意志が強く余程病気がつらいか僕が死んでは一家が路頭に

本

福壽司

心齋橋筋大丸前

電話の三三四番



持ち株の次ぎ次ぎ上る嬉しい日 小松市

月田北海坊

電化するのに移ぎ移ぐのに電化 笠岡市

出原 真奇

奥様のレジャー映画に小半日 松江市

岡崎 雪美

セーターを置き忘れた 京都府

都倉 求女

春の花咲いて棺へ納められ 八尾市

吉田 博一

アベックに出会うまずさに道 岡山県

鳥取 周甫

入口は悲鳴中程すいており 大阪府

中岸 雄水

自家用車ババ運転手 ママお客 松江市

岡崎 祥月

焼石に水の月給仏前に 倉吉市

渡辺 乱坊

広辞典枕代りのクイズ 狂 天竜市

松本鉄太郎

喧嘩両成敗などと仲裁むごく出す ホノルル市

宮政 周防

苗もろて申しわけない花が咲き 大阪市

喜多 柳青

四五日目バイトもさぼる手を覚え 神戸市

生野 晩鐘

盲点をハハハと笑う種あかし 奈良県

房本 文司

無精髭ムードのいらぬ顔で飲み 大阪市

秋田 清三

よう出来ました 滋賀県

金田ゆかり

日記見せ合って二人の恋つづく 大阪市

三栗 夜城

案外の強腰先口あるらしい 徳島県

藤村 優

夜明かしのまぶたはらして初舞台 大阪市

田所 文三

気まぐれの恋が五人の親となり 奈良県

久継 芳春

娘もう一人前の口をきき 東京都

米原 嘉子

サイダーを飲んで手拍子だけ合 天理市

湊 町子

事務服を着ているほうが美人なり 京都府

三輪 雨情

詩人から見れば雨さえ銀の糸 兵庫県

萬司 スエ

秋風へ抜け毛数える細い指 大阪市

葉島 芳祐

駅前是人目が立つと裏で飲み 呉市

植村 澄

次男坊勝ち気に過ぎてよう肥えず 大分県

物部千賀夫

泡一つ二つ残して沼に消え 大阪市

園田 克美

性典の文字へ少女のつづらな眼 和歌山市

法元 貢

泣き声をフタするように乳房あて 名古屋

隆田さかえ

焼鳥を子にしゃぶらせてコップ酒 三重県

寺田 君枝

佗び住まいおかい 東京都

中村 勝

顔ぶれをそろえるために狩り出され 京都市

宮原 博司

鼻の先きやんわりたく淑やかさ 滋賀県

寺尾 純

財産があるので安心して死ねず 大阪市

味原 狂介

借り腰の強いところを見込まれる 大阪市

関 晴巳

我が儘な女房で養子かと訊かれ 吹田市

生田太一郎

泣き声の特集をしてNHK 和歌山市

野口 茂男

衣裳だけ新調にして再婚し 大阪市

勝間田 隆

弱っちゃうと箱根知らずのア 大阪市

山本みどり

迷うと極度の責任感で無い限りやれるものではありません。よく近頃労働争議が長引くと向う鉢巻勇ましく、門前にデントを張って表にハリストと書いた立看板まで立ててやり出すと新聞は写真に撮り、ニュースにしています。が、いやしくも断食は人の為や感しに何日も出来るものではありません。黙って視て居れば精々三四日で店じまいすること請合です。又最大四週間は断食をしても絶対死にませんから慌てることは少しもない筈です。

私は万一直腸や脱腸や腸捻転以外の病気で腹部切開と云う大手術をするか、断食をするかと言われれば、速座に断食をすると言いますが注射や薬やヤイトを毎日続けるか断食をするかと言われれば、速座に毎日注射や薬を飲むと言います。それでは万一直腸病が再発したなら今度は入院するかと云われれば矢張り断食をするか即座に答えます。何故なら私の知っている限りこの病気では私だけが一本の注射も一服の薬も、つらい食餌療法もやらず元の身体になり体重も今では十七貫にも増え毎日元氣一杯に暮しているからです。

只私は学者方に断食は迷信だ、無暴だ、非科学的だ、鼻くそだと頭からけなさず、あらゆる方面から断食を科学して頂き度いと切に思っています。

オー ミステーク



武 部 香 林

川柳の道は感激であり、おどろきであり、愛情であり、発見である。

今や「川柳」は第二芸術でも居候でもなく独立した「川柳」という短詩であることの、認証に立つべきである。

理論家は理論を持たぬものを軽視し、非理論者は理論のみで句は作れないという。前者は実作に乏しく、後者は理論的裏付けの乏しさから、ある段階の低迷より脱け出し得ない危険性をもつのである。いずれも四つに組んでいる姿という事が出来ぬ。

前者にしても生半可な理論であつてはならない、後者にしても川柳は庶民の詩であるから民衆にわかればそれで足れりでおさまっている事は甘い考えと申すべく、そのような所に川柳の発展は望めない。作品をして芸術の域に達せし

める努力を怠ってはならぬ。

川柳活動の第一線を退いてからの私はぼつぼつなりに作句へ専念出来るようになって、おそまきの勉強につとめているが、従来の在り方から少しでも脱皮したいと苦心している。しかし蟬のように鮮やかな芸当は仲々な事、片手片足を脱ぐのも容易ではない。絶えざる研究によって川柳眼を深める事が脱皮への唯一の道であると思ひ、一本の足でも脱け出す努力を続けている。だが努力する苦しみは私にとって生甲斐であり、最大のたのしみなのである。

川柳をくみし易しと扱う事は甚だ危険であつて川柳を知ろうとしない態度と云わねばならぬ、いつまでも同じところを低迷しているのはそうした人達なのであつて、単に川柳をおもちゃにしているに過ぎず、これも四つに組んでいな

いのである。相撲の世界にも似て入幕するにも上位に進むにも、一にも二にも修業である、稽古を励む事によって昇進の道は開ける。

だからと云つて相撲の世界はきびしい、役どころにも水く止どまっていられないが、川柳には引退もなく修業の成果はいわゆる殻をぬぎすて名作家の声はり上げる事が出来よう。ところで川柳に於ける用語なり字句について極めて慎重でなければならぬ事はいずれの場合も同様であるのだが次は私の失敗を告白して御参考ともなればと思つたのである。

数号前の川雑で白柳さんの句評に

「彼には動物的反能しなかつた」の拙吟がセックスの句として採り上げられた。私としてはその様に思つていなかった為少々面喰つた。はてどのような訳でこうなつたか？ 一人で考えているうちふと気付いたので早速雑誌を開いて句を見ると果せる哉「反応」とすべきを「反能」と間違えていたのである。私が見えないための失策で代筆も又うっかり清記してしまつたのが罷り通つたという始末。私のミスが白柳さんへ御迷惑をかける仕儀となつた事をここに深くお詫びしておきたい。

私のこの句のねらいは「動物的」に焦点がおかれていたのである。

近來低下した道義、極端なエゴ、息つく間もない斗争のあけくれ等々、人間らしさの消失非人間的言動を「動物的」の語に集約したつもりである。議会に於てもただ反対せんが為の反対で議場をドロ沼化させたり、一般社会に於ても同様、人間らしさを消失した言動は非人間的と云うべく、これを私は「動物的」と表現しようとした。

何だか句の説明のようだが動物的の語に対して考えた事を述べたかつたのである。

四・十六と二段切りの破調も気になり、いろいろ工夫してみたが結局これより他になかつた。「彼には」も一応「彼等には」といきたかつたが複数を単数に置き替へた。だから特定のモデルなど全然ない事を申し添える。

それからこれより以前のレビュー句評で

「引出しの開けっぱなしで春になり」が時事吟として組上にのつた。なるべく前書をつけぬ方針でいたが、当時あまりにも派手な政治問題になつていたので結句、警職法立往生と前書をつけた。前

書がなければ単なる身辺句として問題はなかつたのだが、こうして句評の前に立つてみるとこれも私のミスだつた事を是認しない訳にはゆかない。

とは云えこれも前の事、先生の力作が約二年に渉つて新聞に発表されたとき、全部抜萃して句集の如くにまとめ、それによつて時事吟のむつかしさを教えられている。自分としては芸術句とならぬ事がわかつていても、川柳人はしくれとして一応はにらんでおく必要はあると思う。



コクヨ
便箋





七小町

富士野鞍馬

七化の所作は歌道の立女形
(タル一二二、一三六)
という川柳があるが、これは「七小町」を、芝居の七変化(へんげ)になぞらえて詠まれた句である。小野小町について、吉田兼好は、「徒然草」に

「小野小町がこと、きはめてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ書に見えたり。その書、清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目録に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。(八三五)小町がさかりなること、その後の事にや、なほおほづかなし。」と書いてある。「玉造」という本は年代が合わないことになる。後人附会の作といわれている。しかし、いろいろの古書から考察すると、小町は、出羽の国司、小野良実の娘ということになっている。十三才の時、天長五年(八二

雨乞小町

京都地方が早魃で農民がこまった時、小町は、勅命を奉じて、神泉苑で、弘法大師の故事にない、雨乞祈禱の歌を詠んだ。その歌は、

ことわりや日の本ならば
てりもせめ
さりとはまた

あめがしたとは

というのである。その効験あらたかに、たちまち雨が降り出し、三日間降り続いて、一般をうるおしたというのである。このころは、小町も若盛りか、

雨乞の頃が小町の和歌ざかり

(タル一七、一六〇)

雨乞の歌もくどきがまじって

(〃二二)

雨乞も女はたと口をきき

(〃六)

と詠まれ、

ぬれごとは小町神泉苑ばかり

(タル三五)

天帝へ小町大きなねだりごと

(〃〃)

さりとはまたとよみてのな

い名歌

(〃四〇)

うちまきが下ったか的小町

きき

(拾 四)

等の句がある。「うちまき」は宮中語で米のこと、雨が降ったので米価が下ったかと小町がきいただろうとうがっている。

草紙洗小町

宮中御歌合せに、小町は大量伴黒主と競詠することになった。黒主は、小町がそれに提出する歌を、立聞きして知って、万葉集草紙に書き入れて、それを携えて御歌合せにのぞんだ。その歌は「水辺の草」という題で、

詩がなくは何を種とて

浮草の

波のうねうね

生ひ茂るらん

というので、小町の勝となったが、黒主は、その歌は万葉集にあるといつて、持参の草紙を示した。小町は創作であることを主張した。そこで紀貫之のとりにして、小町は宣言を得て、黒主の持つて来た草紙を洗ったら、書き入れたことがわかって、黒主は大恥をかいたというのである。それを川柳は、なかなかおもしろく作っている。

まかなく古今稀なる洗濯し

(タル三九)

小町が仕事万葉のあらひはり

(〃八三)

萍に十二単の腕まくり

(〃九四)

玉座間ちかくせんたくは和歌

の論

(〃八二)

せんたくでさっぱりとした和歌の論

(〃六〇)

通小町

いい女公家を百度あるかせる

(傍 二)

深草の少将が、小町に思いをよせたが、百夜通えば意に従うといった。そこで少将は、毎日、雨の夜も、雪の夜も通いつめたが、もう一日で百日というところで、凍え死んだという伝説がある。

謡曲「通小町」では、八瀬の僧が、市原野で、小野小町の幽霊に逢い、四位少将の幽霊も現われて、焦がれ死した物語りをし、共に戒法を授かり成仏する。ということになっている。それで、

気強いと気の長いとが九十九夜

(拾 四)

九十九日うつらうつらと昼寝をし

(タル四七)

少将は少し風気も押して行

(拾 四)

明かすの門へ少将は九十九夜

(タル二七)

しめ切の門だに九十九夜通ひ

(〃六一)

と川柳になっている。小町は「穴なし」という評判があったとも伝えられている。

鸚鵡小町

小町が零落して関寺の辺りに居た時、陽成院の勅使が来て、

雲の上は有りし昔に

かはらねど

同舟近詠

見し玉だれの

内やゆかしき

という御歌を賜わった。小町の返歌は「内やゆかしき」を「内ぞゆかしき」と、やをぞと一字入れかえただけであつた。それは「鸛鵲返し」という歌法である。それで小町はほめられたという。

関寺で久しいものと勅使いひ

(拾 四)

口答えだに小町をば誉めるなり

(万安 九)

覚えよい勅答はぞの一字なり

(万安 七)

勅使ぞの字に気がつかず野暮を云

(万天 四)

口真似で小町あだ名が一つふえ

(タル二〇)

玉だれの内ぞゆかしき一トき

(拾 三)

関寺小町

小町もお婆あさんになつて、関寺の辺に住んで居たが、七夕の日に、関寺の僧が、稚児をつれて訪ね、歌物語りを聞いたという。

謡曲「関寺小町」に

「いや小町とは恥づかしや、色見えてこそ読みし物を。うつろふ物は世の中の、人の心の花や見ゆる、恥かしやわびぬれば、身を浮草の根を絶えて、誘ふふあらば今も、いなんとも思ふ恥かしや。」

「唯権花一日の栄に同じ、あるは無く、無きは数添ふ世の中

に、あはれいづれの日まで歎かんと、詠ぜし事も我ながら、いつまで草の花散じ、葉落ちて残りけるは、露の命なりけるぞ、恋ししの昔や、忍ばし古への身やと、思ひし時だにも、また古事になり行く身の、せめて今は又、はじめの老ぞ恋しき。」

とあり、歌物語りで過去を偲び、老いゆく感想を述べている。

あるきくたびれ関寺へたどりつき

(タル二二)

関寺の頃はこちらでことわりや

(万一四三)

おもかけが変つて小町寺参り

(万一五)

関寺の姿に花の色はなし

(万一五)

に、あはれいづれの日まで歎かんと、詠ぜし事も我ながら、いつまで草の花散じ、葉落ちて残りけるは、露の命なりけるぞ、恋ししの昔や、忍ばし古への身やと、思ひし時だにも、また古事になり行く身の、せめて今は又、はじめの老ぞ恋しき。」

とあり、歌物語りで過去を偲び、老いゆく感想を述べている。

あるきくたびれ関寺へたどりつき

(タル二二)

関寺の頃はこちらでことわりや

(万一四三)

見し玉だれの

内やゆかしき

人生もやれやれ末子式も挙げ
五百株倍になつてもたが知れ
寝るだけのレジャーに生きて小商人

今治市 長野文庫

裏門へ廻れば権力低い腰
病人の弱気へ口べた術もなく

和歌山 秋月 宏方

みな浮動票に読まれている団地
家業継ぐだけの大学惜しまれる

老人は靴ひきずってどこへ行く
しくじりをかばつてくれぬ人生よ

今治市 長野文庫

大阪市 橋本緑雨

パンフレット一束貰った農機展
箸紙へここの方言二つ三つ

片言も言えぬ子へ母本を買い
パチンコへ寄つてとられた雑誌代

レジャーブーム本も読まぬ案ばかり
新居浜市 月原宵明

新潮の弱さ着に飲む屋台
なめくじの佃う家先祖から貰い

禅寺の煮つまる匂い無我破れ
乾盃の力にへこむ紙コップ

十七においおっさんとこずかれる
人波を逆さまにゆく忘れもの

労組は慰安の酒も鉢巻し

今治市 長野文庫

関寺はけんたいぶつた報ひなり

(万明 三)

手入らずの婆ア関寺小町なり

(万安 五)

卒都婆小町

小町はついに乞食のようになり、関寺の卒都婆に腰をかけたて休んでいた。

引とりて無くてそとに腰をかけ

手入らずの婆アそとに腰をかけ

「あまりに苦しい候ほどに、これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候。」

「や、これなる乞食の腰かけたるは、正しく卒都婆にて候ふ、教化してのけうするにて候ふ。」

とあるように、そこへ高野山から出た坊さんが通りかかって、小町を卒都婆から立ち退かそうとしたが、問答となり、小町は坊さんをやりこめた。

返答も卒都婆小町は地口でし

(万明 元)

出る程の坊主ばあにつっこまれ

(万安 八)

関寺の所化衆そなら掛けて居る

(タル一〇)

と川柳もそれを詠み、小町はまた、

極楽の内ならばこそ

悪しからめ

そとは何かは

苦しかるべき

と戯れむれの歌をよんだと、謡曲になっている。

清水小町

謡曲「清水小町」に「さては只今の道しるべせし女は、小野の小町の幽霊なるぞや、いさ弔ひて浮べん。秋風の吹くにつけてもあなめあなめ、小野とは云はじ薄生ひけり。」

とあり、旅僧が市原野をよぎるとき、どこからとなく「秋風の」の歌がきこえた。それをたどつてゆくと、髑髏があつて、その眼のところからススキが生えていた。それが小野小町の髑髏であつたと伝説になっている。そこへ小町の亡霊が現われ、昔語りを聞き、其跡を尋うたということになっている。

川柳も「秋風の」の歌に興味を持ち、

歌でさへ穴目穴目と身をかこち

(タル四九)

糸薄小町の穴を通すなり

(万 五七)

花の色移り変りし枯れ芒

(万 一五五)

眼に薄生えぬ昔の美しき

(万 一二五)

薄で招いては最早はれてなし

(万 一四)

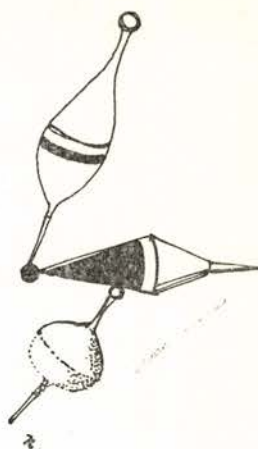
などと詠んでいる。

などと詠んでいる。

などと詠んでいる。

などと詠んでいる。

句評リレー



新潟県市
笠岡市
岡山県
大板市

月原宵明
木山遠二
永松東岸
魚住満潮

借りている方が気楽に歳を越し

豆秋

宵明—平明な十七字の中に世相と人間を皮肉った句である。正直が馬鹿をみると言う、貸した方は苦しむ借りた方が気楽に越年した市民的、落語的な新春情景を想わせる。然し乍ら材題も構想も陳腐、平凡の感なきにしもあらず、評者も過去数句作った記憶がある。失礼をお詫びしますがユーモア作家として尊敬する豆秋さんの作品としては並作では無いでしょう。

遠二—整ったよい句と思うが宵明氏が云われる通りで類句が有りそうな気がする、整った句を見ると、えてしてそんな気がするものではあるが……。

東岸—句会ですでに会った様な記憶もあるが、今誰れの句であったか句報を調べて見たがない、誰れの心にも持っている気持をあっさり取り出して見せて「歳を越

し」と結んだ所に妙味もあり、集金人の非哀がユーモラスに感じられて、この句は生きていると思う。「続西成かいわい」にでも出て来そうな句ですが如何でしょう。

満潮—私の好きな句であるが、豆秋調の句としては佳吟と言うほどでもない、然しながら同氏の句のぶんぶんとしている句だ。御健康の回復の速からんことを切に御祈する。

宵明—田舎でも有り得る越年の庶民の情景で、作品としては極く自然に気品のある所は異色ある川柳家として満潮さんの言われる通り、豆秋さんの句いが漂っている。

この句には創作の苦勞の跡が見受けられないのが残念である。数々の失礼を申し上げたが、切に御快癒を祈り上げます。

遠二—皆さんの述べられた通りでこれ以上批判の余地はありません。

ん。

東岸—この句評リレーが僕の所に廻って来た時豆秋さんの計をお聞きしました。豆秋さんは投句の場合句箋の一枚一枚を娘にやるような気持で書いて出すといつか書かれていましたが、几帳面な豆秋さんの句箋の字が目に入りました、これでおゆるし下さい。

満潮—柳壇の二葉、豆秋さんは遂に亡くなられた。亡くなられる数日前、揮毫された(看板の裏で茄子の花が咲き)の短冊が、拙宅の床の間にかかっている。多くの佳吟を遺されて、名作家豆秋さんは遂に逝かれた、私達には実に大きな悲しみである。満潮の句に若し一句でも取りあげる句があるとすればそれは、平素心のライバルとして勉強させて頂いた豆秋さんの賜である。合掌

臨終へひとり時間は時間を読

み

白星

宵明—臨終と言う厳粛な事実を前にして肉親の誰かの帰着を待ちあぐんで列車の時間表を調べているのであろうが、実は二読三読この句は何やら情味に欠け、臨終への骨肉の愛着に乏しく「ひとり」は単なる「ひとり」しか受取れない、別の見方として、臨終に對する他人の事務的な冷静に立戻って時間表を読む非情の句かと思ってもみたが……。「ひとり」はやっぱり肉親のひとりというのだ。

遠二—臨終の人を前にして数人の中のこの「ひとり」は時間表を見るだけの心の余裕を持って居たと言うのであろうが、もしこの「ひとり」が肉親以外の者であったとしたら、この句は意味のないものになったでしょう。情の嵐に巻きこまれて居ながらも、知の灯は一瞬も消すを許されぬ人の世。等と言えはすこし大袈裟だろうが、ともかくも非情の句ではないようです。

東岸—時間表を見るのは、色々な理由が考えられる、だから時間表を見ているという単なるスケッチでは物足りない、臨終に時間表という意味外のものを持って来たのは巧みが見られますが、

満潮—宵明氏の言われるとおり臨終を前にして近親者の帰省を待ちあぐんで、あわただしい情景の一コマである。この句は、これで立派に出来ていると思う。非

味の七コ

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 06 6684

御集会には階上御利用下さい



情の句とも思われない、非情の句であっても、一向さしつかえないが、それは自から別問題である。この場合は決して非情とは思われない、「時間表を読み」を「見る」と訂正すれば一層切迫した感情が表わされると思うが。

宵明—満潮さんの「時間表を読み」を「見る」と御意見で、私も「繰り」としてみた或はこの「読み」は冊子になっている時間表であらうと。

然しそれよりもやはり「ひとり」は時間表を」とスケッチ的な中途半途(客観の浅さ)などところに物足らなさを感じます、勿論悪い句ではありませんが臨終と時間表の取組みが特に心を動かしてくれないものもあるようです。

遠二—臨終—悲しみに打拉がれている肉親、と考えます、「ひとり

り」も矢張り肉親と解してよいでしょう。そして其場へ帰って来るこれも肉親を臨終の人或は傍の者が待ちに待っている、それがゆゑに時間表を見ていると、それが東岸さんの仰言る「理由云々」のお意見には添ひ得るのではないでしようか、次に満潮さんの「見る」のお説には一応うなずけますが「見る」とすると、「そこへ目をやる」「ヒョイと見上げる」ぐら

いに軽く感じられて場所柄の深刻味が薄れる虞はないものでしょうか、また宵明さんの「緑り」も結構ですが、冊子と、それを繰る手とか大層となり動作が見えず

ぎて、事務的な冷たさが感じられる嫌いではないでしょうか、此処は矢張り原句の「読み」にして、その「ひとり」なる者の目の色を感じたいと思います、つまらぬ事をこせずなよと笑われるかも知れませんが、「読み」「見る」「緑り」と並べて見せて貰ったので、私も釣込まれて考えさせられた訳です。そしてこの句はこの儘でよいのではないかと思います。

東岸―あわただしい臨終の場面で時間表を読んで居るのは気持ちの打ちひしがれている肉親よりも、御近所の親しい方が遠方より帰る肉親のため、お葬式の時間を延ばすとかの為に時間表を読んでいるのではないかと思われるのですが、これは僕の田舎生活のためかも知れません。

またお義理で臨終にかけつた

ひとりが時間表を読んでいるのではないかとも思いました。どうも僕の考えはまとまらないようです。

満潮―三氏の御意見ではほとんど出尽したと思いますから、この上何も申し上げることはありません。結局のところ句主は、臨終と時間表の事務的な取組に川柳を発見されたことと思います。

酔うて云う譯ではないがみなさもし

旅風

宵明―酒の酔いを借って人間のさもしさを衝きつつも何となく諦めに似た弱さを持つこの人も自らのさもしさを指摘して自嘲しているではないか、十七字の中の五、七即ち十二字迄が「話し言葉」で占めているが、それ程十二字の「話し言葉」が成功しているとは思えない、「みなさもし」もみな〇〇〇、みな△△△と動く所に句の安定性が無いようだ。

遠二―わかりにくい句だ。上の十二と下の五がチグハグのようにも思われる。「みなさもし」へは自分は含めてないように思うがどうだろう。―自嘲の句とは思えない。いずれにせよ、上五と、下五はこの句としては捨てられぬものだろうから中七を何とかすべきではないかと思える。「訳ではないが」が私にはわからない。いっそその事に「訳ではないが」をそっくり捨ててしまつたらどんなものか。

東岸―「酔うて言う訳ではないが」という言葉は飲んで席では良く使われる言葉であるが「みなさもし」は「と意見され」と「おだてられ」と動く「みなさもし」という作者の心情が動かせぬとすれば「酔うて言う訳ではないが」はもう一度考えて見たい。

満潮―この句は好人物旅風さんの自嘲の句として立派に成功していると思う。自嘲の句と解することによって、上の十二と下の五とのつり合も、このままでよいと思う。決して動くとは思わない。

宵明―自嘲の句は自嘲としての思想が表現されねばならない、何故さもし、どうしてさもし、何がさもしと問いたくなる、「誰も彼もさもし奴ばかりだ又自分も」と言いたいなれば「訳では無いが」に大した意味はないむしろ「酔うて言う」のが正しいのでは無いでしょうか私には判らない。

遠二―酒の座で、さもしさをさけ出している連中を蔑んでの句かと最初は思いました。それにしては中七の「訳ではないが」がどうも腑に落ちない、(酔うて云うのか知らないがみなさもし)とでもあるならばよくわかるのだが、等というろ頭を傾けた末、この句の主人公が酔うた際に於ける述べ懐の句らしいと思ひつきました、呆してそうとすれば私も宵明さんと同じように何ゆえにさもしいかを問いたくなります。

東岸―満潮さんの言う好人物旅風さんの自嘲の句とお聞きして解りかけてきました。やはり作者なりその人の作品をよく読んでいないと、この句は解りにくいと思います。

満潮―私はいつも句の部分的な面よりも、句の全体よりうける、迫力に酔されるたちの男で、なるほど三氏の仰言る通り、この句は表現の点で難のあることを認めます。

幸ひ句主の旅風さんとは毎月句会で顔を合す関係ですから、直接句主の御意見を拝聴することにします。

母と妻なかよく俺を叱るな

涼髪

宵明―川柳に扱われたものは姑と妻の不和が多い、その反対だから家庭円満であらう、叱られてゐる俺は幸福感に浸っているように、又働きの蜂型の亭主も想像できる。「叱るなり」と言い切った所によさがある。佳句としたい。

遠二―母と妻と俺との仲が頗るうまく行っている事がよくわかる。だが何回か読んだ中に、三人の顔がみんな甘いものに見えずぎて妙に揜つたくなる。もすこし淡い表現によつて読む者を飽かせないことの工夫が必要ではあるまいか。

東岸―無難な句ではあるが、句そのものも甘いと思う、何を叱つ

ているのか解る句が、僕は欲しい。「なかよく」は「一緒に」として、仲のよさは想像してもらつてもいいのではないだろうか、而し「叱る」にやっぱり引かかる激励の意味の叱りなのか、しょうのない人という意味のあきらめの叱りなのか。

満潮―誠に嬉しい平和な家庭風景であるが、句としては、どうかと思う、この句が甘いと思われるのは、句そのものよりも、句主の作句態度に何かきびしいものが缺けているように思う。例えば「川柳はこの程度でよい」とかこれは句主に対して大変無礼な言葉ですが、長い作句期間には誰しもだれと云うことがあるものである。

宵明―甘いという見方が多いようであるが、実際にこの御主人は甘い世間知らずと見てもよいでは無いでしょうか、叱り叱られるところこの句の面白さがあり家庭の状況が伺えるよい句だと思います。

すばらしい
着心地
蝶 矢
シャツ

す。

作句態度の問題も出ているようであるが、之は之と別問題であって作品の上からで無く川柳人として取上げるべきものと思つています。

遠二「一家平和で誠に結構」「三人でうまく調子を合せているわい」「殊更に皆でとほけている」等といろいろに受取れると思います。東岸さんの言われる通り「なかよく」「叱る」に問題があるのでしよう。つまり句の締め方が足りないと言えましよう。

東岸「満潮さんのだれるという言葉が出て来ましたが、だれたり川柳すれがしないよう自戒して行き度いと思ひます。」

満潮「この句を再読している私の耳にラジオは全国三万名の昼飯の喰べられない、缺食児童のあることを告げた、私は原稿紙を伏せて、少しく考え込んだ、そうしてこの句に登場する人々のあまりの倅せに羨ましくおられない。」

黒い大きな車輪が生きる音を立て

敬太

宵明「生の躍動を誇張する感覚か自己満足の、黒い大きな車輪は鉄道か。破調にありがちなきこひなさがあり難解の句である、川柳にこうした部門もあって然るべきだろうが、ご想像に任します川柳は問題である、各位の評をおききして私の蒙を啓きたい。」

遠二「私にもこの句は苦手です

ね。何十年かの前、階段を登る男と題した未来派と称する絵を見たことがある。それには階段らしい物も人間らしいものも一切無くて滅茶苦茶な線がこんがらがったばかりのものであったが、手元にあるままに、目につく事が度重つて、その中に何となく階段や人間らしい物がわかるような気持ちになったおぼえがあります。この句も時間をかけて読んだらと思ひます。」

東岸「機関車の黒い大きな車輪の動き始めをそばで見ていると、いかにも強力な生の躍動を感じることが、句の力は車輪に圧倒されていかにも弱い「生きる音を立て」はもっと力強い表現にしたらと思はれる、支部の句会で「苗代でおたまじやくしがピヨイとはね」と、生命の躍動を感じさせる句がありましたが、御参考までに。」

満潮「機関車の車輪ではないように思う、ブルトザーの様なものと思はれるが、難解だ。初心の当時、何んでもかんでも川柳にしなれば、気が済まない時代が誰にでもある、然し如何なる現象も全部が川柳に成るものではない、絶対に川柳にならない現象もある。この句はその様なことを示めしているように思う。」

宵明「車輪が何であらうとこの句としては問題が無いようだ。強大な黒い車輪に「生きる音を立て」はたしかに蛇尾に終った感を受けます。生の躍動を受受するにピンボケとなった、川柳は何処に

でもころがっているが、満潮説の如く「川柳にならない現象」もあることは賛成だが「川柳に成切しない現象」と言ひたい。

最後に不明の私が各位の作品をピント外れの批評を下し申訳ありません、ひたすら恐縮しております。

遠二「事柄はわかるのだが川柳として見てわからない。川柳もだんだんと新しくならなくてはいいけないが、庶民にわかりやすいものにする努力は必要と思ひます。」

東岸「作者は苦心して作られたのでしようが川柳味には乏しい。車輪はなんの車輪であつたにしても作者がそこで感じた事はどうしても句にしたければ、形を変えていつか作られるでしよう。」

満潮「川柳が庶民の文学である以上誰れでも、速やかに正しく了解の出来るような句を私も望みます。大衆の中から生れた川柳が、鑑賞に当って、未だ難かしい予備知識を必要とし、句意の判明に長時間をかけねばならぬようでは困ります。(古川柳研究は例外)川柳は一部の人の閉つぷしの詠物ではありません。打てば響くという様な名句は、素直に私達の胸に迫るものです。」

(担当 真鍋一瓢)

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句

(一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

(73) 中野柳陽

- (一) 中野源之丞 (二) 柳陽 (三) 中野源之丞

(四) 静岡県駿東郡小山町須走富丘庄 (五) 明治29年6月19日 (六) 静岡県小笠原郡城東町入山瀬 (七) 防犯庁共済組合主事 (八) 須走四五番 (九) 本心は動草へ向く (一〇) 狩猟、野球、釣魚、園芸 (一一) 有 (一二) 大正十年四月

(75) 橋本言也

- (一) 橋本興三郎 (二) 言也 (三) 橋本興三郎

(四) 大阪市東区南新町二丁目20日 (六) 福井市手寄三丁目七〇一 (七) 三共KK社員 (八) 東御九一〇八 (九) 苗床に一本そつがなく芽ばえ (一〇) 謡曲、読書、旅行、麻雀 (一一) 有 (一二) 大正十年頃

(74) 伊藤定子

- (一) 伊藤定子 (二) 定子 (三) 伊藤定子

(四) 大阪市阿倍野区天王寺町北二の三〇四 (五) 大正7年8月1日 (六) 神戸市生田区元町通二丁目二 (七) (主婦) (八) 旅館 (八) 四六二 (九) 牛の背で笛吹く恋がしてみたし (一〇) 釣 (一一) 有 (一二) 昭和三十一年二月

(76) 橋高薫風子

- (一) 橋高薫 (二) 薫風子 (三) 橋高薫

(四) 大阪市北区堂島上二丁目五二 (五) 大正15年7月11日 (六) 尼崎市上阪部三九六 (七) 旅館 (八) 四六二 (九) 牛の背で笛吹く恋がしてみたし (一〇) 釣 (一一) 有 (一二) 昭和三十一年二月

(九) 几帳面がさせる多忙をあわれに見 (一〇) 栗曲、読書 (一一) 有 (勢火) (一二) 昭和十一年五月



続・川柳料理暦 (二)

水谷竹莊

真夏の味覚と祭り

船渡御を待つ船の上ビルの
お神輿の練りに戸惑っている
ハイヤ
八九寸
台所祭り太鼓を聞いただけ

旭峯

大阪の夏祭りには、ハモのてり
焼、タコの酢のもの、かいわれ菜
(闇引き菜)と天ぷらのたき合
せ、この三つがかかせない祭りの
御馳走になっている。これにま
た、ハモと胡瓜の酢のものはた
いての家の食卓にでる。

胡瓜もみ出来て主待つ薄化粧
また、真夏になると、かまぼ
屋さんの店頭に、ハモでつくった
アンペイが姿をみせる、白身のハ
ダはみた目に涼しいし、さらりと
した淡味は、暑さにげんやりして
いる胃袋にもさわりがよいもので
ある。この外に、ハモチリ、どひ
んむし、揚げもの、ハモすし等
々、いろいろあるが、小骨がやた
らに多く、まず骨切りをしてから

でないと食いものにならない、こ
の骨切りが一般の奥さまがたに
は、ちよつと手に負えない、刃渡
り五十センチ以上の長目、背が高
く、重みのある包丁をときすまし
包丁自体の重量と切れ味をかみあ
わせて、サク、サクと全身に切れ
目を入れる「この厚さ一寸(三・
三センチ)の身を二十五口切れ」
というのが鉄則だ、つまり一切れ
の厚さは一・三ミリということだ
が、一流の料亭の調理士でも一ミ
リが精いっぱいと思う。

ハモを使った、カマボコ、アン
ペイは上ものだが安もののかまば
こには、タチウオ、フカ、サメ、
イカ、ハブなどで作られる。
又、ハモの使った後の残り頭や
骨は煮出すと高級なダシになる、
肉を食い、皮を焼き、頭や骨まで
ダシに生かす、まことに「ガムつ
い」そして合理的な大阪人の生き
方が真夏の味覚に現われているの
が面白い。

お祭りによばれ料理の説を
聞き
三杯酢きやしゃな小指で味
をきき
東雲
十九平

鰻の皮キユツといつ杯もう
駄目か 豆秋
如才なく味も姑にみてもら
い 好郎

若返りによい料理

昔から「若返りの妙薬」という
言葉がある、これはただの一つば
なしてはない。

大阪市大東政学部食品教室の渡
辺正助教授が裏付けされているか
ら信用してよい。

その説によると、人間の細胞を
粘結させているコンドロイチン流
酸塩というのがある。これは皮フ
の老化防止に役立つもので、近頃
これをもとにして売薬「不老薬」
として町に出回っている、ハモの
皮にはこのコンドロイチン流酸塩
が多いのである。中国でフカのヒ
レや、フタの耳や鼻を不老長寿の
妙薬としているのと同じことであ
る、それに骨切りは食べよくする
だけで、骨そのものは、ハモの体
内に残っているのだから、カルシ
ウム分の豊富なことば論を待たな
い、だからハモの皮を利用した料
理を食べることは若返り法の第一
の料理といえる。

このハモの皮はカマボコの廃物
利用でハモの身を使った残りの皮
に、薄醤油をつけて、焼いてあ
る、これをカマボコ屋から買って
来て、皮についた無数の小骨をハ
サミで全部切り取って、更にもう

一度火であぶってから、小口より
出来るだけ細かく切る、丹念に細
く切らないと、もみ瓜とまぜて
も、しつくり舌にのらない、胡瓜
とハモの皮は出合いのものでこれ
は関西好みのイキナ酢の物でもあ
る。

また胡瓜と酢は相性がよい、あ
りふれたこの料理は別に説明する
必要もないが、大切なのは酢の使
い方である、もちろん米酢にこし
た事はないが今は殆ど合成の醋酸
性が用いられているから、ビンの
口をあけるなり、酢の強い匂いが
鼻をつくようなのは、出しげや清
酒をまぜて中和させてから使うと
よい。

五十年味で板場は泣かされ
る 柳 叟
庖丁の牙え屋台にはおしい
味 三 司
大阪の味で旅愁をもてなさ
れ 潮 花

ハモには
内海ものと
外海ものと
があるが、
味は内海も
のがよい、
四国の阿波
から土佐沖
にかけての
太平洋岸、
さらに大分
宮崎、鹿児
島の海岸で
とれるもの

が、近海ものといわれ、一本釣り
でとる、外海ものはトロール船が
東シナ海まで出かけて底引き網で
ごつそりとして帰って来る、外海
ものは骨もこわく生臭いので注意
が必要である。

東京や関東地方では不思議なほ
どハモを食べない「ハモが西日本
でとれるというだけでなく、あの
淡泊な味の下さや骨切りなどとい
うややくい料理法に、東京人は
なじんでないんですわ」と大阪の
料理屋や食通は言うが、ともかく
若返り料理として安くうまい関
西特有の料理を食べられるよう、
おすすめする。

味のこと言わず学者の飯が
すみ 万 楽
上方の味ねちこさもがめつ
さも 没食子
味はめてまたお代りをする
積り 進之助
次分はすしとまぜ(続く)

ビールは。アサヒ

和やかな
雰囲気をつくります

人の心を
明るくします

楽しいものです

外海ものと
内海ものと
があるが、
味は内海も
のがよい、
四国の阿波
から土佐沖
にかけての
太平洋岸、
さらに大分
宮崎、鹿児
島の海岸で
とれるもの

川柳ILO



ILO（国際労働機構）総会で「週四十時間労働」の討議されるがそれとは別に今やILO時代という。
 インスタント（即席）レジャー（余暇）オイルド、つまりパイナル（復讐）時代に、わが川柳人は何を弄しているか、その川柳ILO時代をチョッピリのぞいてみましょう。
 編集局

INSTANT 句会におもう

・長谷川三司・

川上三太郎氏は句はわが子である。

梶元紋太さんは句は己れであり、発表後の句は現在の己れでなく、過去の自分であると言って居られる。どちらも真で両方のような気もする。

私などの拙い句でも我が子のようについてまでも抱いて居いた句もあれば、過去として放棄さり見向もしない句もある。

これが我が子だと人々に見せ歩くような句はそう出来るものではない。句会でも出席者の多数の句の約三分の一以上は闇から闇にほうむり去られ、残って出来上がった子も育ちが悪く消えてしまう句の方が多い。

句会で句を生む苦しさは、丁度女の産褥に似た苦しみの中にも嬉しい愉しさがある。

句を生む愉しさは何も句会ばかりではないが、川柳は句会に始まり句会によって育ち発展し進歩し句会が現在の川柳界と言ってもよい程である。

川柳界が出来るまでの明治前半には、時事風俗に対する諷刺的即興的な句ばかりのようで、川柳界が認められかけたのも明治後半の句会の句からである。

現在は句会が無くても句を発表する柳誌にこと欠かないが、現在の川柳界から句会を取り去ってしまったら現在の川柳人と称する人口が何万人あるか知らないが、その何

百分の一何千分の一しか残らないであろう。あるいは消えて無くなるかも知れない。なくなれば柳誌の経営も困難となり、柳誌が消えては発表する機関もなくなり、川柳の社会化も文学的向上もない。

私の住む尼崎の周辺だけでも毎月の句会が十指に余る程あり、中には十数年も続けて居る会も二三あり、みなそれぞれに人々を集め愉しく句会の醍醐味に浸って精進して居るが、中には句会を軽視する事が大川柳家のように錯覚して云々する人がある。そんな人はやれ句会は過去のものであり句会に於ける題詠吟などは詩でない文学でない、すくなくとも文学であり詩であるためには題によらず自由に自主的に自己の感動を句の上に表現するのでもあり、感動は日常の生活から生れる課題に依って生れるものでない。こと新らしく言うがそんな事は十数年前から言われ論議されて来たことで、今だに句会であり、その句会も益々盛んに一夜に百余人も集めうるは何故か。川柳は大家のものであり、川柳人は衆と共に在り衆と共に楽しむ心が甚だ多いからで、句会軽視の論を吐きながらも句会に出席し句会と離れられないのは句会がその目的の大半をしめて居るからで、みんな句会から生れ、句会によって育って来た云わば故里である。

川柳は文学として孤高の精神に徹しなければいけない、川柳は詩であるとか詩で無いとか、文学とはなどと固執しい議論は私には苦

手でまたその任でもない。私は課題吟でも雑吟でも同じように思っている。句会に於ける課題は第二義的にしろその文学的感動とやらを引出すための便宜的なもので、雑吟と言っても何かのテーマがあり題を付ければなんでも付けられる。たとえば偶然に出来た句でも偶感とか無題とかつければ題の一つである。ようは育ちであり句の質である。句会吟でも故豆秋若やS君のように数々の佳句を残して居る人もある。

川柳を川柳として世に問う文学的に価値ある水準に引き上げ、文学として前進するためには議論よりも佳句を作る事である。議論のない所に進歩が無いと云うかも知れないが百の議論よりも句である。

こんな事を書くに句会万端、句会中心主義のように見られるが、私として現在の川柳界に欠けているのは川柳に関する理論であり、雑吟の良さも知っては居るが、理論ばかりが先き走って川柳が地に付かなければ、なんにもならない事

LEISURE しりとり雑筆

・正本水客・

数年前に定年退職して横浜で悠々自適のKさんから今年の正月も賀状を戴いた「新春の御名句を待てうしく期待しています。レジャー景気に当面して」つき過ぎた勤

で、川柳をしつかり大地に付ける事である。

雑詠にしたところで今の雑詠は句会をお尻にくっつけての雑詠であるように今の川柳界には、まだまだ句会が必要なのである。やがては雑詠が主となり、句会がなくても柳誌が無くても立派に川柳として文学として社会に潤歩出来る日を私も願うものである。

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

ウロコ印



（12種の成分を配合）
リポコル

20錠・50錠・100錠

ろと辞書を引いたり、物知り人に尋ねてみたりしたが、どうもよく分らない。それから何ヶ月かしてからである。関西でレジャー何と盛んに言い出したのは、プームは関東からゆつくり西下してきたらしい。

○ 五月の本社句会の兼題「レジャー」の天位が「天皇のレジャーはカニとたわむれる」と発表されたとき、やったなと私は思わずニヤリとした。天皇と啄木のコンビなど如何にも一三夫さんらしい。天皇が特にピンときたのは訳がある。4月22日に奈良支部が発足して、2回目の句会が5月6日に持たれた。奈良高校生ばかりの珍らしいグループである。私にも面倒をみるということで初夏の半日を出掛けていった。いま家の畠でとってきたばかりという初物の苺を持って笛生君が迎えにくれていた。会場はつつしが今を盛りと色を競っていた。その時の私の話のなかに天皇のことがあったのを思い出したからである。天皇は生物学の学者であられる。海で貝類や生物の採集をされる時は舟を止めておいて不要の物は、その場で海へ返されるし、高原で植物の採集をされる時も、その場で選り分けて要らないものは元あった場所へ植えておかれると聞いている。すべて生物は、それぞれ適応した生活環境に住んでいるので、どこか海、どこかの土でもいいと言うもの

ではないというお心であらう。それは、てらいや見栄でなく、ごく自然にそうされるであらうことは、まったくなお人柄から推して、さもあるうと思われる。

○ 川柳する場合にも、自分の言おうとすることに最も適した言葉、ビタリと動かない表現を探し出す、そこに難かしさがあり、また本当の楽しさがあるのである。

ビタリと動かない表現と言えば、四月号の川雑で七面山さんが「ひき逃げはそんな大物とは知らず」の句に対して、加害者大もの説と被害者大もの説について色々検討しておられ、六月号で日満さんが反撥して、被害者大もの説となえておられる。

レジャーの楽しさである。

○ 間違った解釈で、句を没にされるのはかなわぬが、反対に採られることも有難くない。

実際、選者によって入選句がまるつきり違った形相を呈してくることは、よく経験するところである。

いつか三司さんが句会札質を書いていた中で「あの選者なら僕は出句しない」と極端に言う人もいるが、私はそんな事はない。あの選者なら没と解って居ても私は私の句を出している、後でその選者の入選句と比べて見て一人はほえむ」と言っている。

「あの選者なら出句しない」と言ったのは多分私のことだろうと思う。その選者がきらいだから等と軽蔑したり高ぶったりしている意味では毛頭ない。自分のセンスが分って貰えないとハッキリしている場合、その人に迎合するような句は勿論つくりたくない。かと言って達者に陽の目を見たかも知れない自分の苦勞して作った子を流産させていたくはないし、一度死んでしまった子を、もう一度はかの機会に生き返らして使うというようなことは、これこそ礼を失するものであらう。要は自分の産んだ子が可愛いのである。自分の句が大事なのである。

後で入選と比べて一人ははえんでいる三司さんの方が役者が一枚うえらしい。

あの句会で、私は主観句は採り

ませんと言った選者がある。又、私は明るい句が好きだから悲しい句や暗いテーマのものは戴きませんと言った選者がある。又、技講の際、車券とあるのはおかしいので馬券に直して置きましたと、今時に競輪のことを御存じがないのかと思われる選者がある。いずれも相当古い柳歴の方々である。選者も作者も勉強々々である。

○ 勉強と言えは、こんなことがあった。

先日、阪神沿線の魚崎にいる姉の所を久し振りに訪ねた。海までは五百メートルほどの近さである。長男のT君が釣竿をかついでニコニコと帰ってきた。ビクの中はニイラギと六七寸のタナゴが五匹ばかり。タナゴは大きな腹をしている、いい子(卵)がはいっているぞと喜んで包丁をスッと入ると、小指の半分くらいの小さな魚がサラサラサラとあふれ出てきた。ヒヤッとお魚をいっぱい吞んでと肝をひやしたが、よく見ると、みんな同じ形をしたタナゴの子である。

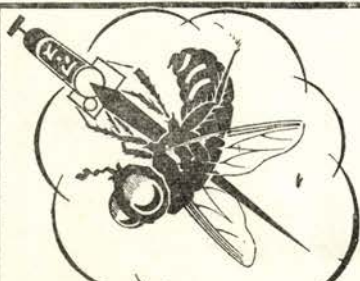
魚にも胎生があるのだろうか、釣好きにも聞いてみたが、どうも腑におちない。調査研究の結果(オーバーだな)疑問は氷解した。鳥や魚のように母体から産み出された受精卵が外界から受けるのが「卵生」であり、哺乳類のように母体内で胎盤から栄養をとり成長してから産れてくるのが「胎生」である、ここまでは常識と

す早い効き目! よい匂い!

安全殺虫剤

旅行・登山等御携帯に
自噴式罐入

アースエアゾール



木村製菓

絵と川柳で表現する歴史

(第16回)

戸田古方

(29) 中世後期

十字軍は中世の時代でした。時代は一目散に次の時代へすすみます。

教会の

信用はま

すです地

におちま

して、ヨ

ーロッパ

には百年

戦争が英

仏の間に

つづいて

イギリス

には三十

年つづく

バラ戦争

がおこり

ます。そし

て中世のし

ん柱とい

われる封

建制度が

こわされ

てゆきま



百年戦争はほとんど英国の一方的勝利だったのですが、末期に出てまたフランスの少女ジャンダークはフランス人の愛国心をかりたてまし

させもしました。

イギリスは元米、羊を飼っ

てその毛を大陸へ売っていま

したが、その羊毛が北仏フラ

ンダースで毛織物になると割

高な値段で買わされていま

したので、何とかしてイギ

リス人は羊毛から製品への

一貫作業を夢みながら、そ

れが出来ませんでした。

これからイギリスは世界

一流の国家になる下地を作

ってゆくのです。

十字軍以来の商業の発達

はますます盛んになってゆ

きます。

スペインがサラセン人を

追いはらって、ゲルマン人

の国をつくってスペイン王

国となります。そして早速

東洋への海のみちをみつに

のり出すのです。

六才にしてすでに利息の鼠算

して分っているんだが、その中間に「卵胎生」というのがある訳である。卵は母体の中でかえって親に近い形で産み出されるが、胎生とは違って母体との栄養的な連なりはなく、卵の中にたくわえられた栄養で大きくくなって出てくるんだという。タナゴの外にサメとエイ、熱帯魚のグッピー、それにマムシもこれに属する訳である。待てよ、この項はレジャーだけで川柳に関係がない、結びに一句つけずばなるまい。

今テレビは四十八才の誕生日にちなんだリサイタルで森繁が喋っている、「……思えば私も四十八年を生きてきた、その間に少しは生長したろうか、それは分らない……」独特の含み声である。私の半生も長い年月であったが、或いはその全部が余暇であったかも知れない。されば、日々に川柳する喜びを持つことによって「余暇に川柳を作る楽しさ」を書けという編集局の課題は果たされたことになる。善き哉。

(36・6・10)

OLD
リバイバル

・若本多久志・

七月初旬にジュネーブで開かれるILO総会に出席する為、我が石田労働大臣が羽田を出発するといふ新聞記事で、何かよそごとのように読んでいる裡に、最近、ジャーナリズムの新造語であるI (instant) L (leisure) O (old revival) 時代というのを思い出してぐずぐずたくなり、且つ川柳編集子の川柳味あふれる企画に感心させられながら、この随想にペンを走らせてゆこう。

丁度六月十日、夜のテレビで森繁、唱うところの懐しのメロデーに明治生れの感傷をふるわせていたかと思うと、翌日曜の朝は、ベレー帽にスポーシヤットという、当年とって六十才とは思えぬようないでたちで、オーブンカーのハ

ンドルを握り六甲のハイウエーをドライブしている自分を内省してみると、何かしら取り残されそうな大きな世相へ、はかないレジスタンスを試みているようで、哀れの極みである。

それでいて、最近、女性の服装をその最として、映画に、歌謡曲に、果は国の政治、教育の面にまで深度の復古調が見られる事に対して、そんなに喜ばしいとも思えず、ほろにがさを感じる気持は、いったいどうした心理なのだろうか。

毎月二回、ライオンズクラブの例会で、初め必ず国歌斉唱。この言葉も一寸おかしいものがあるが、今のメンバーが明治、大正生れで占められている内は問題もな

十字軍帰還地球は広いなと思ひ

○ 火刑の時刻仏王ただ拜み

(30) ルネサンス
レオナルド・ダ・ヴィンチ

が出たり、ミケランジェロが興のことは左の

すみの太陽であらわすことにしまして、自然発見、人間発見の時代でありました。それより時代の大きな転換をまず見てゆくことにしましょう。

東洋から伝つて来たという、磁石、火薬、印刷術はヨーロッパ人の手にもたらされて飛躍の大発展をしたのです。

磁石は方向を示す羅針盤となり、やがて、東方へのみちをみちびくのです。コロンブスのアメリカ発見も、バスコダガマのインド航路も、マゼ

ランの世界一週もみな磁石のおかげです。

火薬は市民軍の編成を可能にしました。剣を使う技術

が必要としない鉄砲の時代となるのですが、それは封建貴族の存在を段々せめていったのです。

最後の印刷術は聖書の印刷を可能にしました。マルチ

ちを正すことになるのです。それが宗教改革の成功でした。

キリスト教の改新とともに旧キリスト教も反省作用を起

しヤソ会を組織し、ヨーロッパ以外に大いに進出しました。フランシスコ・ザビエルの日本に於ける活躍もここに

出てくるのです。



ン・ルーテルはラテン語の聖

書を地方の俗語ドイツ語に訳し、それを印刷にして、普及することによりまして、今までの棚の上から手近かにおろし、教会のもろもろのあやま

又復活して

きた旧キリスト教と新キリスト教の争いがしばらくヨーロッパをひ

つかまわします。政治と

宗教とのむす

びつきが、政治と経済のむ

すびつきになるまでつづく

のです。それは十七・八世紀の絶対王制

時代でありま

芸用解剖屍の胸に燭を立て

ほったたをつねると生きていたわたし

かろうが、昭和生れのメンバーで占められるようになったら、とてもあの雰囲気は出ないだろうと、「君が代」一札の幹部が話していたが、そうなると思うと真に寂しいことだとも思うが、又一面、それでいいのだという諦観も湧く。かく考え及んでくると、要するに、現代のリバイバルムードというようなものは、我々年寄の懐古趣味から成り立つ流行ではなくて、あの「抱っ子ちゃん」のように、突如、襲われてすぐに消えてゆく、泡沫的流行の一端なのではなからうか。そして、昭和生れの、然も二十才たらずの流行歌手が、どんなにうまくカチンヤや枯すすきを唱つても、あの時代、あの頃、我々が唄った懐かしいあのムードは少しも必ひ出てくる訳もないのだから所詮、明日の命は期し難いのが当然であろう。六・一二

續

川柳書架

(10)

新川柳鑑賞

(麻生路郎著)

★巻頭の「著者の言葉」で、何故この本を出したかということを書き、次でその「凡例」の一節を抜くと、

★「新川柳鑑賞」は一般の読者を目標に執筆したもので、句の鑑賞を多少解説的に、興味的にしたこ

とをこわって置く。本書の鑑賞句は主として月刊「川柳雑誌」から拾ったが、他の柳誌や句集からの名吟も鑑賞したので五百六十三句の多きに及んでいる」と。

★目次を挙げると、

四季・恋・酒・果物・夫婦を中心。女・男・職業・職人・上役・下役・衣・食・住・金・趣味・旅・仏・神・動物・植物・難・真珠句抄(附録)

★昭和三十四年七月十日発行。定価二五〇円。B6版二四四頁。大阪市住吉区万代西五丁目二五番地川柳雑誌社発行。

★著者は柳誌「川柳雑誌」を主宰。多数の著書がある。

竹の光

(大谷五花村著)

★本書は著者の随筆と句集である。

★目次を抜くと、

随筆——川柳界交際の憲法。川柳作法に於ける一偏見。川柳美観。剣花坊先生と私。白河の関異聞。旅と雲助。川柳の物語。川柳宗家と其の宝物。

新川柳——敗戦譚。新日本。インフレ。反逆。大地。慾の世。追放。風雨。我が心。思い出。世相。陽の光り。無表情。花の宴。句碑。金婚の人。初日の出。放心。生活。

★昭和二十九年一月二十五日発行。傾価二〇〇円。B6版一二二頁。発行所福島県西白河郡五箇村借宿。東北川柳会。

★著者は在戦時代に「東北川柳」を主宰。



入門講座

研究題「葉」

清水白柳

葉という課題は大へん巾が広くて、焦点をしばり句にまとめられるのに困られたことと思います。それだけに着想を練ることに力を入れた跡が見えて、たのしく拝見いたしました。楠公父子別れの「桜井の駅」は青葉しげれるの歌で有名なので句も多くありましたがいずれも説明の域を脱けていませんでした。

「桜井の駅」

哀感をそそる青葉の過去の虫

桜井の駅へ青葉の笛想う

前の句の過去の虫が一才交に感じられます。それは青葉についている虫なのか、それとも過去という字があるからです。後の句の青葉の笛は敦盛の持っていた笛ではないかと思えます。この場合笛でなくて青葉の歌ではないでしうか。

葉の生命線が渦巻き値を支え葉という題で葉そのものを句に

するのは、題を説明するようなものですから、成るべく題から一歩退いて自分の生活の中の一コマとして題を見つめるようにして頂くと句が出来易いと思います。この句も万年青か何かの観葉植物が渦巻きによって値が高くなるという事です。それだけでは句として生命がありません。渦巻きに喜びか悲しみを感じている句主のことに心掛けてほしいと思わす。

葉をあつめおせんおちやわん子ら遊び
Y
まさことのことで銀杏が札の役
美舟
前の句は葉でまさことをしているのを十七字にのほしたただけの句ですが、後の句は銀杏の葉がお金に使われているという処がよいと思われま。

A 笹の葉の舟へ童心夢をのせ
G
B ささ舟に心の旅を載せる児等
C もち竿へ葉が通せんほして

一篇 蟬かほう

D 目に青葉童話の姫と恋やせん
和三郎

Aの句はささ舟というものを笹の葉の舟と無駄な字句を使って、まだその上に童心と夢と同じような感じのする説明があるので句がぼやけてしまっています。Bの句は心の旅という字句が非常に佳いと思いましたが、載せる児等と作り放したような感じの結びがこの句の弱点になっているようです。Cの句はせみとりの児を詠んだのですが、葉が通せんぼうしたというところが句の重点になって居ります。これは課題をよく見つめて作句して居られる証拠であります。Dの句は今回の集句の中の佳句と思いましたが、それは空想的な恋を、青葉の光りの中に描いていかなく青春の頃の感じが詠まれて居るからであります。

ささの葉の褪せてちまきの蒸し上がり
S
裾分けのお餅へ添えた葉が匂う
八九寸

ちまきの句は事実その通りなのですが、その通りそのまゝのことを十七字にまとめただけではいけないと思われま。葉の色があせたのを見つけた作者の細心の点はわかりませんがもつと感じがなければならぬのではないでしようか。お裾分けの句は何の葉か知りませんがこの句も葉の匂いを感じただけで、句主の喜びが現われて居りません。

H 花鉄心ゆくまで葉を落し

一葉でも切らねば師匠気がすます
美舟

どちらも活花の句ですが、心ゆくまでという現わし方に心をひかれましたが、葉を落すのが気になりました。私は活花の流儀を知りませんが、一般的な見方しか出来ませんが、課題の葉にこだわって落しなさいという題ではないでしようか。若し枝という題であれば枝を切りとされたかも知れない下五に弱点を感じました。一葉でもの句にもこれと同じようなことが言えるのではないかと思います。したが、一葉の場合は動きがないようです。

大根葉妻榮養も言うて炊き
静水
老齢は大根の葉も持帰り

後の句は大根の葉を持って帰ったことだけの報告のような句になっていますが、前の句は、榮養もというの字に千金の重みを感じます。榮養をなつて居ればそれだけの句になつてしまつて居ります。榮養もでその炊いて居る妻の姿までが浮かび上つてくるのですから一字の使い方によつて句が生きてくるよ例と思ひました。

巻かぬ葉を愚痴りキャベツの虫をとり
勝子
キャベツの葉今朝も青虫三つとり
同
どちらの句も同じことを言っているわけですが後の句の三つという具体性が面白く思ひました。それが一つであつても二つであつてもよいですが三つというところに面白さを感じさせるようです。

葉をむしり女返事を声にせず
和三郎
葉をちぎるだけで返事はまだ聞けず
南宗
前の句の返事を声にせずという下五が成功して居ると思ひました。後の句の下五まだ聞けずで句主は男性の心理を描いているのです。勿論葉をちぎっているのは若い女性であることは申すまでもないと思ひます。

A 落葉除った樋下からも吐く落葉
八九寸
B 樋を埋むと嘆けど伐れず庭の松
K
C 辛うじてくもの巣枯葉支えたり
T

Aの句は樋の掃除をした様子を詠んでいるのですが少しゴタゴタしすぎた句になってしまいました。二段に切った下段の下からも吐く落葉はよいと思ひますが上段を

金泥集

麻生 苡乃選

[illegible]

耳打ちをされてついでに肩うたは
ほんほんに耳打ちされて赤くなり
耳打ちをしてやつたのに勘違い
耳打ちで入知恵をするもどかしい
云うて云うてと孫が耳を持つて来る
耳打ちをまますにされて気がわるし
耳打ちを女將はつけと心得る
耳打ちは苦肉の策か秘書下る
客筋へ仲居耳打ちされてくる
耳打ちに来たは追加をせよと言う
耳打ちへ祖母の返事の大さすぎ
耳打ちの二人はそと座をはずし
耳打ちで云うにあきた声を出す
耳うちを衣術の絹の影でする
このカモを絞めよとママの耳打ちだ

周甫	同	德子	同	奈良子	同	春榮	同	醉夢	同	一榮	同	清子	同	カネ女
次回題「針」		次切七月未日		得意げに耳打ちをする女の子		マダムから耳打ちされて元氣つき		耳打ちに仲居要領よく捌き		耳打ちに仕度迷わせたシャネルの香		耳打ちで落ち合う所確かめる		耳打ちが又も姑の勘にふれ
同		同		好女		由女		美喜		同		同		同
乃		江		三子		良子		あやめ		同		同		同

もう少し考えるともつこよい句は
 になったろうと思われます。Bの
 句は理屈の方が先になってしまっ
 て句に面白さがありません。それ
 は簡単な内納しが持つていない
 に句が重なりし表現になっている
 からではないかと思われます。C
 の句はこまかいところを見つけら
 れている作意は佳いと思うのです
 が枯葉文えたりで説明調になつた
 ようです。もうすこし深く見つめ
 て、くるくるまわつて居る情景と
 か何かを感じさせはしかなかった
 と思いました。上五の辛うじては、
 それを想像させますがもう少しで
 惜しいと思いました。

A 面会を青葉の下まで持つて
 行き 千 甫

B 寝ころべば葉を洩る光り皆
 円い 弘 村

C 三面鏡へ映る青葉へ顔を
 かけ 初 甫

D 乳のます女人夫へ若葉かけ
光 道

E つれ人は庭の青葉に目を外

らし
隆史

Aの句は面会という字句が焦点
になって成功していると思ひ
ます。すがすがしい風まで感じさ
せる佳句になって居ります。Bの
句のまろい光が着想の佳さと句の
表現に面白さを感じさせます。日
蝕の際の葉を洩れる日影が太陽の
欠ける形になってうつっているの
を思ひ出させてくれました。Cの
句の女性らしさの心使いといひま
すかそうしたものを感じさせて成
功している句であります。Dの句
の人間味といひますかその情景に
心をひかれます。この句の場合の
若葉がけは添えもののように感じ
られがちですが、若葉のかけであ
ってこそ、この句が生きてくる
言えます。Eの句のつれ人は描写
不足であるように思ひます。い
つそ恋人としたらと考へてみま
した。タツチの句になって居りま
す。伴せの窓蔭の葉にうすもれ

て
初甫

古い別荘を描いて成功していま

す。しかし深い句とは言えません。左遷校若葉の中にしよんぼりと
左遷されてきた校舎がしよんぼりと目にうつったのは、自分が左遷されたというひがみからでしょう。児童達の目には若葉にうずまいた。たのしい校舎であるはずなのに。
自信あるようにさし木の葉をむしり 美舟
自信あるようにという字句にうがちを持っています。
葉もたべる料理 こまめに教えるとき 千甫
こまめに教えるという句の焦点がよいと思います。こまめにでその教え方まで想像できるのがよいと感じました。
いい事に松葉があつてトゲが抜け 南宗
着想によって成功した句であります。表現も軽くスラスラと詠まれているのが佳いと思いました。

A わくら葉の散るまで生きる
夢を持ち S
B 双葉かななどと出世をほめ
ちぎり H
C 我が齢を不図憶い出す青葉
蔭 八郎
A はわくら葉の散るまでは元満
すぎる点があり、生きる夢という
だけでは句に焦点を求めることが
出来ません。B も平凡な着想で
す。だれでも一度は句にすること
です。すからこの境地を抜ける苦
心をしてほしいと思います。C の
は年令的な詠嘆であります。年
だけに終っているようです。年を
とってから川柳を始めた人があ
りなかなかわつかしいものだと言
て居られる人がありますが、年を
とってから作りかけられた人でも
、青年におとらぬ清新な感覚をも
絶えず努力して作句することに心
がけて居られますと若い人におと
らぬ句が生れますから頑張つて下
さい。

日曜閑棕櫚の葉の蠅叩き

セルロイドの蠅叩きでないところ
に句主の年令が現われていて面白
いと思います。そして日曜が閑
である生活も描写されていて軽
若葉道セルルス定職とはな
らぬ
深いものを持って居る句であります
。落葉であれば非常に淋しい
ものを感ぜさせるだけであります
が、若葉であれば、月並果を抜
け、人間のなせりを感じさせて
句が深くなるわけであります
。続きにつけてみれば顔だけ葉
にかぎつて
面白い句であります。カメヲ自
慢の腕前を思い出させて苦笑させ
るのが佳いと思います。今後共の
御支援をおねがいします。

次回研究題「汗」
メ切 七月二十日
発表 九月号
宛先 大阪府南河内郡美原町
丹上四〇四
清水白柳宛

静観堂

大坂戎ざし布

丹青堂

॥ श्रीगणेशाय नमः ॥

色紙短冊

書画用品

清水白柳宛



集路一

民謡

小西無鬼選

民謡に昔の恋がおりこまれ 周甫
畑縁作業の中に郷土の民謡 市郎
民謡も教えてガイド講習会 弘道
民謡があんなにうまい恋仇 卯之助
民謡へ宿の女中も同じ故郷 伸太郎
民謡の一節ガイドに聞かされる 庸佑
聞かすには帰れぬ佐渡へ来ておけさ 光郎
民謡踊り娘達に匂う紺がすり 同
民謡を売物にして観光課 蜻蛉
民謡へきれいだころも動員し 雄々
民謡の昔をしのぶ松が鳴り 同
民謡は残り景色はダムの底実男

民謡を浴衣に染めた旅の宿 鶴汀
民謡の歌詞と同じ雨になり 同
民謡が巧い男の国訛り 和三郎
民謡の手拍子一人増え二人増え 圭井堂
民謡でレジャー楽しむ主婦の会 たけお
順番が近づき民謡集めくる 光道
まかり出て小使ながら黒田節 同
団体の席ぬけおてもやん 習い 八九寸
酔うほどにソーラン節の声暴れ 涼髪
マスコミに整形されたこの民謡 拳児
舌足らず幼女の民謡機微に触れ 八郎
民謡へ若き手をうつばかりなり 宗太郎
民謡でかせぎ三橋はハワイ行き 照児
民謡の一つ一つにわく情緒 藤波
民謡を唄って大町 植え終り 同
民謡をかけてガイドは息を抜き 井蛙
民謡を読み読み土産買うて来る 初甫
民謡になって踊りの輪がのびる 光一
民謡も雨情の歌詞という 誇り 豊年
民謡をふと口ずさむ異郷の地 祥月
民謡へもう三味線も合わかね 尚史
正調のおけさみやげにうたわされ 淀月
故郷を民謡酒場でしのぶ宵 どんたく
ブラッシュで飲んだは二十の春のこと 同
民謡のその一節がうら悲し 徹也
レジャーブーム民謡酒場派手にする 一鶴
酔えば歌う一つ覚えも国自慢 むじな
生国を云えばおけさを所望され 同

民謡はやっぱり三味に乗せる味 義夫
民謡が一夜泊りの胸に泌み 愛場
二日酔い民謡唄う父でよし 季賛
民謡を忘れしやんすな箸袋 代仕男
丹前の酒民謡が寛ろがせ 同
民謡と軍歌の好きなお父うさん ひろし
民謡へ遙か祖国をなみだぐみ 好女
聞きとれぬなまりの唄で国自慢 生薑
民謡で孫を守りする良い機嫌 草々
三味太鼓尺八民謡派手になり 古心
正調の追分ですと前置きし 瑞歩
民謡もしぶいのだですお仲間 雄水
民謡はガイドにまかせウイスキー 雄声
民謡も時代にあった節となり 圭水
民謡も歌って婦人のマスゲーム 十九平
民謡へフト郷愁がゆさぶられ 恵二朗
かじりさしばかり民謡酒に酔い 孝風
どこでどう着替えて来たか安米節 ひか平

佳

地

民謡へ旅の広間の総踊り 伸太郎
君が代も民謡と言う日教組 圭井堂
民謡も替歌の方よくおほえ 葵丘
民謡へうっとりしてる妻楊枝 初甫
民謡も唄う社長でストも無し 保夫
民謡の一番うまいどもり口 蛙水

眼鏡

太田良子選

民謡へお酌ストップして合わし ひか平
天
黒田節唄うて社長もう居らず 宗太郎
バーの昼マダムは眼鏡で算用中 光一
メイドシヨウに眼鏡拭き拭きばかりつき 繁太郎
眼鏡せぬ写真仲人持つてゆき 淀月
アルサロで置き忘れたる伊達眼鏡 同
老眼鏡美人の前でかけそびれ どんたく
逢うだけの大目眼鏡ふき終り 保夫
目の不自由らしい眼鏡へ座をゆすり 一鶴
眼鏡忘れたと劇場から電話 愛場
落ちそうな眼鏡医博も頼りなし 同
この石が勝負眼鏡を取って打ち ひか平
映画だけメガネかけるも女なり 弘村
老眼も近眼も要る俺になり 挙児
新聞は来たが眼鏡が見当らず 周甫
淋しさが眼鏡の奥で光る女史 弘道
教養を眼鏡の奥に光らせる 卯之助
印の要る書類眼鏡を掛け直し 伸太郎
眼鏡ふきふき叱言まだつづき 静水
こんな所にあった眼鏡へ苦笑する 光郎
面切った切らぬで眼鏡もうはし 同
共有の眼鏡となつた共白髪 圭井堂
悪夜の薄み添えてる黒眼鏡 勝子

又眼鏡で見られてとも知らぬ窓 鶴汀
ザーマスの眼鏡の底にある自信 同

青白い眼鏡は秀才らしい見え 葵丘
夕焼けが眼鏡に映えてこ栄転 涼髪

大番の眼鏡質値をくるわさず 同
眼鏡拭きふき社運見逃がさず 九呂平

悪い事似て一人っ子に要る眼鏡 藤波
見当らぬ眼鏡を孫が鼻にかけ 井蛙

足元を見すかす質屋眼鏡越し 義夫
黒眼鏡かけて犯人さがすデカ 雪美

眼鏡越し小言の種を考える 祥月
読み違え眼鏡忘れたせいにする 同

読みさしへ父の眼鏡は狹まれる 代仕男
長男も僕に似たのか要る眼鏡 季賛

金縁の眼鏡がつんと鼻にのり 好女
話夢中ひたいへ眼鏡あすけられ 生薑

養老院眼鏡が並ぶ手内職 清心
うれしさは眼鏡したまま顔洗い 圭水

眼鏡忘れた事務机落ち着かず 孝風
盲ら判押すに眼鏡の玉を拭き 宗太郎

モンタージュのこれは眼鏡をかけたところ 同
尻を追う癖が老眼まだとれず 実男

人
又眼鏡の的になつて差向い 八九寸
眼鏡屋の世辞はどなしを一つ売り 実男

大安へ眼鏡は邪魔な高島田 雄々
軸

老眼と診断をしてむくれられ

海岸

小浜牧人選

海岸の岩にデイトの腰を据え 古心

汐干狩ママも腰までまくり上げ 市郎

海岸のアベック漁師気にもせず 初甫

海岸で汗の仲仕とすれ違い 卯之助

貝拾い少女の気分に浸りきり 鮎子

船の見えるところまで行くと子に云われ 雄水

打ち明けて欲しい海辺のもどかしさ 淀月

あの人の名の砂文字を波が消し どんたく

海岸の二人へ夕陽まぶしすぎ 雪美

海岸の夏を稼いでバンガロー ひろし

海岸へ並び遠足石を投げ 同

海岸に足投げ出して処女魚う 涼髪

海岸へ来て日本を広くみる 九呂平

潮の香を車窓で嗅いで五月晴れ 十九平

浪荒き磯の小石の美しく 光道

台風情報もう海岸は逃げ仕度 弘道

砂風呂へかもめも波も白い腹 生薑

投身の気を変えさせた波の音 雄声

湯の香り潮の香りと溶け合つて 恵二朗

海岸で和服の妻は遅れがち ひか平

海岸のデイトに困るハイヒール 雄々

沖見える離れアベックまだ泊り 八九寸

海岸へ来て別荘が欲しくなり 旭峯

海岸へ来て何もかも忘れたい 祥月

夏近し浜辺はボート塗つて待ち 代仕男

海岸の恋はオゾンも吸うてくる 保夫

海岸へ行季が上つた日のさわぎ 葵丘

病床へ汽船が横切る窓の中 和三郎

海岸を見ずに麻雀して帰り 初甫

海岸で育つた祖母のミルク嫌い 光一

海岸の砂地へ恋が燃え残り 鶴汀

海岸へ来てます便り出養生 伸太郎

逃げなくていいのに海岸の小蟹たち 好女

島の子へ本土が近い汽車走る 静水

海岸の月に船歌聞こえそう 卯之助

海岸のデイトと分る砂をつ 実男

海岸に親類がある夏休み 恵二朗

この浜も今年かぎりの埋立地 圭井堂

海岸へぼつたりホテル立つ名所 宗太郎

海岸の見える部屋だけ予約され 圭水

海岸の足跡ここでもつれ合い 瑞歩

海岸の眺めを見舞はめて去に 静水

佳
水と空海岸に立つ僕ひとり 周甫

磯づたい片手は波にあずけきり 黒天子

海岸で女真夏のポーズをし 孝風

海岸の一日山の子のさわぎ 藤波

海岸の砂を愛して散歩すき 蜻蛉

海岸で一つ演説やつてみる ひか平

海岸の墓標は時化を呼ぶごとし 夢虹

悲しみよ砕けと波がくり返し 尚夫

渚行くビキニスタイル臍を出し 光郎

書割りの海岸にも月がある 蛙水

人
海岸のデイトどちらにもサングラス 十九平

地
海岸の何かあがつた人だから 圭井堂

天
海岸の夕陽裸の子が帰る 同

軸
海岸のムードへ愛を告白す

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

品質優良

先カペン



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大阪市東区常盤町一丁目十一番地

立川ペン先株式会社

柳界展望

句会

▼恒例の本社「川柳まつり」は七月十六日(日)午後一時から南区大空寺中五丁目二六の大成閣で開催。この機会に各地柳人諸氏多数ご出席の上交歓されたい。▼南区医師会文化部杏林川柳句会(大阪)は六月二十日午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院



中島生々庵副主幹の渡欧 (六月六日午後九時大阪駅発「明星」で東上、九日十時半お田から) 大阪駅で路郎夫妻を始め栗・文輝・春泉・いわを・多久志・竹莊・一哲・白柳・一三夫・重風子その他多数の人々が送迎した。左端が主々庵副主幹。

橋上で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪)は六月十五日午後六時半から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は六月十六日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院六月句会は二十四日午後二時から五階会議室で開催。▼川維にしなり支部句会は六月十八日午後六時から後藤梅志居で開催。以上路郎主幹出席。▼川維奈良支部句会は六月三日午後一時十分から奈良高校で開催。▼川維岡山支部句会は五月二十日赤岡山支部で開催。▼ひろしま川柳第一例会は六月一日第二例会は午後六時から広島駅二階会議室で開催。▼大鉄川柳会(大阪市)は六月十一日嵯峨野吟行を開催。▼明和川柳研究会(西宮市)甲南川柳教室、はばたき川柳会合同の石山寺、三井寺バス吟行は五月二十一日午前九時から開催。▼第四回近県川柳大会(竹原市)は九月十日(日)午前十一時三十分から竹原市照連寺で開催、兼題は宿帳・夜長・連れ子・嘘・穴・他人・泡。▼落合行詩堂著「四十一年の夢」出版記念会(東京都)は六月二十四日午後五時三十分から渋谷区恵比寿東一ノ五一行詩社で

開催。▼「ねぶた」第百五十号記念誌上旬会(黒石市)の兼題は歩く・レジャー・銀・恋・金庫・明るい・楽家・平均・マダム・満足・どっちもどっち・拓く・満ち潮・即・泣き声・観光バス・手・黒いもの・神様・白昼・鼻・流れる壁・耐える。投句はバガキ型用紙へ一題一句明記、五十円封入の上七月三十一日までに黒石市大字市ノ町青森川柳社宛「第百回東北川柳大会前哨戦誌上競吟会(仙台市)は兼題、新・口笛・時の氏神・海底・うれし泣き・祝電・花と女・うろうろ、一題二句以内、各題別紙に明記の上七月二十日までに東八番丁一七〇川柳宮城野社宛



六月の不朽詞杯を獲得した城正一氏を祝う会(玉造支部)

▼しなの川柳社(松本市)七月例会は十五日(木)午後七時から新伊勢町三枝塗料橋上で開催。▼観光川柳七月句会(東京都)は九日午後一時から港区芝新橋六ノ六六伊藤路天居で開催、兼題、開封・筆まめ・忘却、会費五十円。▼噴煙七月句会(熊本市)は十日(月)午後六時から健軍町京塚住宅四二四号七谷虹橋橋居で開催、兼題、天下・一身上・利点、会費五十円。▼伊勢柳園七月句会(津市)は七月八日(土)午後六時から三重川柳会事務所で開催、兼題、新・一言、会費三十円。▼初代川柳の菩提寺、竜宝寺(東京都)に川柳会館が竣工、五月二十七日(土)午後一時から落成式並びに落成記念句会が開催された。▼広島川柳会創立四十周年記念広島平和祭川柳大会は八月六日(日)午前十時から広島市袋町山陽記念館二階ホールで開催。▼平安川柳社(京都市)七月例会は七月一日(土)午後六時三十分から寺町通仏光寺上ル東側透玄寺で開催、兼題、平凡・予感・隅。

消息
▼路郎本社主幹は六月五日(月)午後二時から生国魂神社事務所で開催された、大阪芸文協会第九十六回講演会で、「川柳種々相」と題して講演された。▼路郎主幹は六月七日奈良県立医大附属病院に入院中の上田翠光氏を見舞われ、同病棟の耳鼻咽喉科医長内海貞三氏(元、阪大川柳会員)を訪問された。▼河村瑞川氏(大阪市)は六月九日エール・フランス機で羽田空港を出発、西欧医学視察のため渡欧された。▼路郎主幹と八木摩太郎氏(堺市)は六月十二日午後三時から高石町海浜荘で開催された、堺市友会総会に出席、主幹は特に選ばれて講演された。▼若本多久志氏(西宮市)は六月三日、日航機で東上、会議の余暇に銀座高島屋で開催中の俵屋宗達展を見学、大いに感銘された。▼上田翠光氏(奈良県)は四月中旬、樫原

大阪・東京 京都・神戸

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ!

大丸

不朽洞の人々



余興のベテラン成屋kkの西尾業社社長

あきらめて妻も一緒に手をたたき

(笑)

世にも稀なる音痴をカバーする為にあみだしたる
インスタントの踊りだ。自作自演の振り付だから踊る
たんに違うのも已むを得ぬ。余り上品な場所ではやれ
ないのが玉に瑕だ。

市奈良県立医大附属病院北一階五
七号室に入院加療中の由、速やか
な御快癒をお祈り申し上げる。
▼堀川蘇堂氏(西宮市)は六月六
日社用のため紀州路の旅を続けて
おられるが、紀三井寺を車窓から
眺めながら、亡き豆秋氏を哀惜す
るお便りを寄せられた。「煙吐く
汽車なつかしく紀の路行く」▼西
いわを氏(大阪市)は六月五日社
の慰安会で北陸路に遊ばれ片山津
温泉で一泊、雨の湯の里で、静か
な一日を楽しまれた。「湯の煙柴
山瀧は眠ってる」▼橋本緑雨氏
(大阪市)は五月二十六日中央公
会堂で大阪写真材料組合の五十周
年記念式典に参列、表彰状と記念
章を受けられた。▼阿部佐保蘭氏
(東京都)は六月中旬、吾妻スカ
イライン、裏磐梯、飯塚温泉周遊
の一泊旅行を楽しまれた。「磐梯
へ来てうらめしい今日の雨」▼伊
志田孝三郎氏(名古屋市)は五月
十四日第十五回長野県川柳大会に

出席、百名を越す参加者に驚かれ
たと。▼正本本客氏(大阪市)は
六月十一日大鉄川柳壁紙野吟行に
参加、快晴の洛北の青葉を満喫さ
れ、あだし野の念仏寺に初夏の半
日を過ぎた。「名塔八千青葉の
底にうずもれて」▼清水白柳氏(大
阪府)は六月四日某社の階段で三
り左肘を負傷されたが、六月は、
一日に息女が盲腸のため市民病院
入院手術され、令息が現場で
怪我をされたたりで腐心して居られ
る由。▼浅川八郎氏(富田林市)
は五月二十五日左足首を骨折、加
療中とのこと。▼林昌男氏(大阪
府)は大阪市の堂島職業安定所へ
栄転された。▼山田季賛氏(広島
県)は四月末に肝臓障害と診断さ
れ、病院通いも仕事に追われてま
まにならぬ毎日ですが、川柳のお
陰で病気を克服していると信じて
います。▼池田可宵氏(長崎
市)からの句信。先日御巡幸のあ
ったあさみ谷は雲仙でも珍しい

あさみの多い谷間です。「スカ
ーで若やぎ給うあさみ谷」▼米沢
晴明氏(大洲市)は五月二十五
日、全国放送教育研究会連盟総会
へ出席のため上京、帰途の二十九
日に本社を来訪された。▼遠山可
住氏(兵庫県)は勤務先の講習で
約半年間東京に滞在される由。
▼小西無鬼氏(兵庫県)は議会の
係、町内会長、民生委員の仕事や
ボート・スカウトの運営などのため
多忙の日を送っていられるが、令
息の結婚で忙しさが倍加、嬉しい
悲鳴をあげていられると。

柳書・柳誌

▼落合行詩堂著「四十年の夢」が
昭和三十六年六月一日東京都改谷
区恵比寿東一ノ一五行詩社から発
行された。前回出版の行詩社百五
十年に新たな十年間の収獲からの百
五十点を加え「旅」の絵と写真を
折り込み編集されたもの。定価五
百円。▼「柳都」誌は六月一日百
五十号記念特集号を発行。▼「せ
んば」誌は六月一日発行の六月号
で百五十号を迎えた。
慶 弔
▼里田一十氏(菅屋市)の子息
勤也氏は五月二十五日矢倉真芸さ
んとめでたく結婚された。お慶び
申し上げる。▼西辻竹青氏(奈良
県)の愛婿吉典氏は肝臓癌のため
奈良県立大附属病院に入院加療中
のところ、六月十六日死亡され
た。謹悼。▼川端柳風氏(東京
都)の長女裕子さんは五月十九日
死去された。哀悼。▼岡田鹿の子
氏(堺市)は肺気腫のため六月
七日午後一時半、堺市民病院で
永眠された。翌八日午後四時から
宗然寺で告別式執行。享年六〇
才。氏は本名藤治郎、歯科医(医
博)、番傘川柳社同人。なお六月
二十一日午後六時から堺市立集
所で追悼句会が開催された。

改号

▼小島さぎす氏(大阪市)は孝夫
と改号された。

こりと痛みに
サロンパス

久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪

不朽洞

会から
★七月は「川柳ま
つり」の月なの
で、不朽洞会員全
員を挙げて張り切
っている。

☆新会員紹介

五月 井阪東天紅(和泉市) 正
好郎氏推薦

六月 高橋尚史(大阪府) 正
好郎氏推薦

▼岡沢凡志氏(兵庫県) 家庭事情
により五月限り退会された。
(多)

転居・社屋移転

▼前川左文字氏(池田市) は池田
市宇保町一七住宅公園池田団地
四ノ四〇六号室へ転居。▼近藤高
史氏(大阪市) は大阪府西淀川区

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 豆秋追悼句会 (大阪市)

6月8日 午後6時
会場——関西会館

須崎豆秋氏が生前いかに多くの人から親しまれていたか、それを裏書きするよう
に、各吟社の人々が続々出席してくだ
さる中に堀口塊人氏のお顔も見えた。

詩人小野十三郎氏の弔文を栗氏が静かに代読、つづいて外遊中の不朽洞会理事
長中島生々庵氏の挨拶を多志氏が代
読。川維阿倍野支部を代表して松江梅里
氏は、豆秋氏の助言で店が繁栄したこと
など語られ、路郎主幹はわが子をうしな
ったように悲しまれ、嗚咽せしめし声も
出ないほどであった。満堂むせび泣く
中、姿なき豆秋氏も出席されていたの
ではないか。阿倍野支部からのお供養が
くばられ故人の霊に合掌した。この日新
鏡城正一氏が堂々不朽洞賞杯を手にな
れた。

出席者—路郎・一三夫・愛倫・藍兒・
梅里・文秋・塚子・圭井堂・多志・文
蝶・塊人・鈍・む・鎮海・水京・柳宏子
・正一・亜純・水洞・有岡・葉光・句念
坊・菁風・万葉・葉・沐天・十悟・喜仙
・狂二・計光・奈良子・繁雄・三司・喜
久堂・白柳・好郎・杏花・いさむ・晃・
求女・尚史・静升・瑞歩・薫風子・夢虹

・舟遊・与呂志・緑雨・南宗・恒明・水
客・草々・阿茶・敬也・太路・言也・生
董・形水・雄声・蘭徒・芳川・庸佑・角
嵐・一瓢・大丘子・三窓・花村・喜右衛
門・宏子・夢乃

兼題「貸し傘」 川村好郎選

降る降らぬスツメで傘を貸し 旅風
貸し傘に商魂躍る 太い文字 晃
返すにはおよばぬという傘を貸し 角嵐
くれてやるつもり傘をさがし出し 多志
女傘女房返しにゆくと云う 阿茶
借りた傘見れば我が家で貸した傘 狂二
駅へ傘もどつて人情とりもどし 一三夫
津気さは貸し傘包み提げてくる 喜久堂
内心はシブシブ貸した傘の 文蝶
貸し傘の返らぬままに梅雨が明け 白柳
一本貸して片袖ずつは濡れさす気 柳
貸し傘を大切な客へ残しとき 万葉
貸し傘も備えて人の道を説き 梅里
チンドン屋みたいな傘を貸して呉れ 静馬
貸し傘が何時しか消えたモラル 狂二
貸し傘を干して見ゆる海の虹 晃
立候補の下地は無料の傘を貸し 夢
言うとおきない傘を貸して呉れ 静馬
サーブスは貸し傘後を追いつける 文蝶
貸し傘の整備よろしく社も栄え 沐天
セロテープ貼って貸し傘返えされる 文
奥さんが始きはるやと傘を貸し 言也
貸し傘を合相傘にして 帰り 牧人
貸し傘をかかん照りに持ち歩き 喜仙
貸し傘を知らない方がさしている 太路
貸し傘が万身痛傷で戻つて来 圭井堂
借り傘を貸してやつてる別れ道 尚史
遠方の順で貸し傘渡される 角嵐
返していきまんない番傘の重さ 菜
貸し傘をまちがひの傘の重さ 緑雨
宿の傘ロータリオン足の冷え 水客
貸し傘が親類回りして 正一
付け馬の代りにマダム傘を貸し 好郎

兼題「厄除け」 橋本緑雨選

厄除けにスターを使う年男 梅里
厄除けを信じる程に落ちぶれる 翠光
山門に頑と仁王は厄を除け 言也
厄除けのお札の下で老夫婦 一瓢
厄除けのお守り肌をはなさない 喜仙
厄除けを持たせて母は安堵する 有岡
厄除けのお札の熨けたままでよし 与呂志
厄除けのお札女の年が知れ 三司
厄除けも信じて祖母のつづがなし 愛倫
玄人の母で厄除け信じて居 青風
厄除けは酒をやめるにしかず 亜純
旅をする子へお守りを持たせて 一鶴
厄除けに夫婦で詣る年まわり 旅風
厄除けをしなと同僚に進められ 季費
信じて厄除け妻へ逆らわず 晦明
厄除けのお守り一笑に附す若さ 青風
気やすめやがなと厄除けしてもいい 青風
厄除けの寺できれいな女に逢い 青風
厄除けもせず多忙で切り抜ける 青風
人間の弱さは厄除け頼りにし 青風
厄除けに明治の意地を持ちつづ 青風
厄除けを残したままで転宅し 青風
厄除けを受けて見よと気が弱り 青風
夢虹

兼題「手探ぐり」 小川恒明選

手探ぐりのたしかこらに置いた筈 旅風
手探ぐりも巧み夜景という舞台 旅風
手探ぐりでがっちりつかんだ命綱 一鶴
停電に手探ぐり同士突き当たり 文蝶
病人の手探ぐりへ猫じゃれに 文蝶
手探ぐりの光り見える方へ行き 菁風
手探ぐりて見た感覚も同じ 求女
手探ぐりで見た象さんのこと 求女
手探ぐりで器用に通す下駄に杖 井平
目かくしへ耳が頼りの手が泳ぎ 井平
手探ぐりへ案外広い四帖半 翠光
手探ぐりでバチンコの銭たしかめる 水洞
手さぐりでうっかり押した非常ベル 塊人
梅里

兼題「踏み台」 金井文秋選

手探ぐりのボタン一と穴飛んでおり 阿茶
見だこんなどにあつたのかと手探ぐりおか 雄声
かんじんの処で手探ぐりおでこ打ち 柳宏子
手探ぐりのデンボだんだんおちたり 舟遊
手探ぐり上手にフィルム巻き替える 舟遊
母のちち手探ぐり赤児又眠る 弘村
やみくもに夫婦で生きてきた 水客
手探ぐりへおんなし型の靴ばかり 水洞
手探ぐりで少女点字の弔辞読む 角嵐
手探ぐりをして盲人の孤独知る 葉光

踏み台の重き旧家の色であり 水客
踏み台に今日から衣替えの箱 万葉
針箱を踏み台にして叱られる 醉升
踏み台で留守番菓子を探し当てる 葉光
踏み台と母と燈明 一家無事 葉光
踏み台が我が背の低さあざ笑ひ 計光
神様へ踏み台の要る火を燈し 文蝶
旧家なりまだ踏み台に肩を入れ 一三夫
恐わがりに踏み台しつつかまされ 一三夫
踏み台にされ脇腹で相手をし 阿茶
踏み台を二三度ゆすつて見て上り 醉升
踏み台へ巨象言われるままだに立ち 南宗
踏み台で探がす蔵書はままだに 一三夫
抽出して踏み台にする知恵がつき 梅里
子の代へ踏み台になる金をため 水洞
踏み台にママとなる日を心得る 恒明
雨樋のいボールへ父の肩が要り 水洞
踏み台は当分要らぬ子が帰省 一三夫
梯子出す程ではないと箱を積み 井平
踏み台に徹して温長と老教師 弘村
踏み台にされて課長にもならず 牧人
有象無象ばかりで踏み台にならず 逸名
踏み台のつてこれかとかからわれ 庸佑
踏み台は隣りの秘密見てしまひ 翠光
棚つて踏み台シカと持ち 黙平
踏み台も担ぎ現場へ来るカメラ 言也
踏み台の夫はおろすだけの役 堰子

ソ聯もう宇宙を赤く塗りたがり
雲のない宇宙は青く青く澄み
電話口寝巻のままの声でなし
友禪を晒す小川の春の音
サンダルに素足夜店も春の音
春の音じつと聴いてる蟬
春の音分校の子へ遠雪崩
雨ぬくむバン傘久し振りにさし
古傷でも有ってほしい倦怠期
古傷をこれだと見せてつつつかれる
古傷をいまさら野党からつかれ
古傷へアハハと笑うほど出世
ベタ惚れの二人古傷には触れず
寝巻を着てもうさうで歩くけそう

川維 ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

連 柳 白 文 秋 葉 平 六 竜 子 生 薑 冬 樹 慎 太郎 牧 人 三 司 満 潮 梅 志

悪人の暴力派手なテレビジョン
悪人を利用してまで金儲け
リバイバル悪人共に神の声
強請られる弱味の悪人上があり
悪人に替る化粧も舞台裏
皮肉にも金のないのが当選し
悪人の眼には善人馬鹿に見え
悪人も寄る年波に争えず
皮肉にも内証の株がはねあがり
悪ダンサー飛行切符で終りとり
皮肉とは知らず札まで云々去に
大望の男子理屈で妻いじめ
皮肉って見たが結局歯がたたず
皮肉だけ並べ道義に疏い記事
解釈は君の勝手と皮肉に出
皮肉までまともにとれ拍子ぬけ
真実に生きて皮肉を聞き流し
皮肉云々と盆で押し返し
女房に甘い母に皮肉られ
天性の美貌が惜しやちんばなり

川維 京都支部句会（京都市）

田中鳥雀報

柳 葉 萩 路 須 磨 子 緑 星 泉 水 銀 水 押 山 玉 屋 魔 花 麗 内 海 防 周 園 峯 園 曉 舟 呆 児 万 里 歩 平 八 郎 義 一 快 夢 起

風呂屋の天窓に落日がある今日の幸
草被れた丸さで赤い陽が落ちる
白壁の相合傘に落日のまとも
絶叫の地底に埋れたるいのち
男今宵女に見せぬ絶叫す
絶叫は雪崩に消えし春あわれ
幻は嘲笑ばかり蒲団敷く
母の乳房もはらし目目の児に生れ
みみず、みみず、困地の高き鉢に住み
意地悪な子がいるのみ嫌いな子
大きなクレームが巻き上る風景はかもめ
あたまたの上で指まかれてる男
時計巻くこの二十四時無事なれと

川維 浜寺支部句会（堺市）

復活二周年

川村好郎報

夜明けさえ知らぬ若さがうらやまし
夜が明けて人が寝てるロータリー
夜が明けてみれば煩悶あはらし
名人のノミは夜明けを知らぬ音
太陽のめぐみ平等に夜が明ける
夜明けとは良いものを知る試験前
口惜しさがつるのつるのつるのつるの
夜明けまだ語り尽さない久し振り
旅楽し一駅毎に夜が明け
夜が明ける大和と三山まだ霞
何事も昨日の夜が明けて
ドヤ街の夜明けあくびが大きな
夜明け前漸くけんかのけりがつき
夜明けの美しさを思ひ老妻まで起し
中央へ行くトラップで知る夜明け
ばあやのトイレ夜明けだと思ひ
船の旅夜明けの空吸いに出る
夜明け遠し坊やの熱が待ちかねる
むき出しに云えばあつさり断られ
むき出しの毛髪を避けて蚊がときり
お祝いの鯛はむき出し見せたがり
公休の仲居は子への包みもの

磯 和 三 郎 英 佐 緒 鳥 雀 真 砂 極 堂 司 郎 生 薑 尚 平 晴 芽 ゆ き ら 紫 蘭 つる子

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

7月号発売中

130円（〒12円）

特集

美容食脚光浴ひるか
ビールを選ぶ要素
醤油製煙の問題

講座

食品衛生行政の組織②
界面活性剤の利用⑨

◇海外ニュース ◇特許ニュース
◇意匠ニュース ◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社

大阪市北区
大森 9373-4

大阪 6702番

川維 篠山支部句会（兵庫県）

酒井ひか平報

母の眼が風邪をひくと薄着せめ
息とめるような着換えの影があり
マキヤと脱がすのんちよとてれ
会長の名刺が上り脱がさない
そとと背へまわりし妻へ背広脱ぐ
ユモリスト金を貯めるのが不思議
ユモアを混じえ講師はそらさない
せち辛い世にユモアを持続し

泰 子 ひか平 可 住 左 文 字 青 峰 美 千 代 孝 風

川維 備前支部句会（岡山県）

横山一声報

除悪な座をはぐらかすユモア
付き合いに泣いてる顔を見て苦笑
親切な女中であつた国訛り
親切にされて親の上まで話し
窓口に貼つた親切破れかけ
駅長が尻押し込んで苦笑し
公僕が弱み苦笑して済まし
玄関へ打水をしてカモを待ち
番大の居る玄関で待せられ
花嫁の門出玄関でとりまかれ
小言など言うまいたまの日曜日
金策はできず小言だけでもらい
小言でも味わって聞く年になり
小姑の小言が溝を深くさせ
姑の小言まだまだ深るなり

川維 米子支部句会（米子市）

米子市

小西雄々報

乾杯のあと割勘で飲みなおし 無閑
内職で晩酌ありがたや有難や 雄丸
飲代を妻にもらつて勤めに 出
ドドンバも明治の頭にピンと来ず 青香
温泉へしけ込む花見の雨もよし 素瓢
おみくじも賑戦するほど貧し 蛙眠子
いさぎよく雨に叩かれ花の下 天邪鬼
投書筆身が落ちつければ種がなく 一机
死ぬほどに愛する人へ嘘も言い 翠月
リバイバルブーム離婚の妻帰る 幸子
鉢巻をしめ給料あがる職 幸子
マネービル計画倒れの二階借り 篤司
割勘で気楽に入る お汁粉屋 福女

川維 奈良支部句会 (奈良市)

宮口笛生報

山が好き転んですべつて山が好き 源太
お金では買えない山の良い空気 鏡太
しめしめトラの巻教師のと同じ 建彦
山膚が斜めにつじの社あり 敬太郎
波の型手で色を塗る 鯉織り
鯉織り日本男子ここにあり 博吉
鯉織り三男坊にある嘆き 二郎
若い命を軽々と奪う山が生き 三知郎
山山送電線が消えてゆき 春己
トラの巻本屋の小父さんなつかし 福助
授業中次々 トラの巻 啓林
鯉織りかくれんぼしてるビルの街 壮士
どんてんの空に矢車止まりおり 敬三
春れば山も眠むたい色になり 白溪子
答だけ載つててうすいトラの巻 敬三
鯉織り今日直角の風があり 笛生
槍、穂高朝の男の息白く 水客

川維 広島支部句会 (広島県)

平田越舟報

規則無視かみなり族は道り過ぎ 吐川
押し合ひ揉合いウツユアワで三年 昌幸

出しやばりの指揮で急場の片がつき 美文
ラッシャーワットが 一層さわつた 上利
タクシードラゴン 電車が先に着き 二荷
出しやばりに 女は強く生き 二三夫
ラッシャーワット 過ぎて淋しい傘が待ち 越舟

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

月若き宵 婚約の整いぬ 新子
刹那主義若し月日は経ちやすし 牧人
若い血が久方ぶりに湧く 寮歌
若い目が見ている 政治家よ
恋の木の高し若さを失わず 千尋
窓のみに泣き若さを失わず 三窓
いくさなき 俸思 寝正月 有岡
やせた土地値上り待つ 手離 大丘子
責任を自覚して立つ成人の日 舟遊
一人立ち出来て成人腰ひくし 六竜子
プロローグ 牛師の唄 幕が開き 三司
牛の顔とつけたような真剣さ 照児
友達の顔後一軒は惚れた 半歩
友達の値上げが最後まで 満秋
貸金の値上げが最後まで 夢風
絵ハガキのインクの牛は瘦せている 和三郎
友ありてまだ情熱を失なわず 夢風
友達へ金の出来たが遠ざかり 和三郎
故郷を思う頃すでに若さなし 夢風
友達と終ればおしい女の子 夢風
牛の仔も殖えてのどかな開こん地 川柳堂

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

ベッドからベッドへよめく 試歩の 草右
「このベッドでした」と退院なつかし 夏生
看病の疲れベッドにもたれ寝る 竹莊
赤チンへきずの深さをたずねられ 宏子
夫婦けんか赤チンつけたヤツがもと 風仙洞
子沢山赤チンだらけの子が並び 八ナ子
柏嶋戦思わす力の入るベッド 史葉
正装をしても看護婦の匂いする 愛論

看護婦の若さに気付く退院日 春雄
お大事にと一言看護婦針を抜き 竹青
レコが出来なやみが一つふとまた 竹志
レジャーブーム 専主女房が気にかかり よしを
八卦見になやみやみが深くなり 露児
ぜいたくなやみやみが続くなり 春巢
酔うて寝たベッシーヨシキと足を出し 没食子
なやみ多し金拾うてもなやむなり 路郎

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

折詰を形見のようにちと残し 一男
三人の智慧で読んでる軸があり 好祐
幹事の予算狂わす牡丹咲き 九平
政変のわけ狂わすいた女将 紫始
女将今日女に返つた色と艶 三
薄情な奴で女がよくかか 雄水
お役所は規則々と薄情な 晴暉
賽銭ははすみ乞食は目もくれず 雅堂
薄情にしてされて夜の蝶生き 芒
薄情な母さんで良いと手配が位 一徹
八百長の喧嘩大きな奴が負け 京一
八百長の裏と表で札が舞い 柳
八百長の巻き添え食つた消防署 白柳
八百長とは知らずに馬は走られ 白水

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

ダンブカーナンバートレイトにまになり 句念坊
ダンブカー電車の方で気を使い 圭水
ダンブカー道無き道を行く如し 貴山
ヘナチヨコを吹つてはしりダンブカー 宏子
ダンブカーの上からコラとぬかしたり 摩太郎
又一つ小さな命ダンブ消し みなつき
ダンブカー土砂で無い荷を積たい日 貴山
運チャンの昼寝待つてるダンブカー 摩太郎
ダンブカー大回鉄を慌てさせ 圭水
ダンブカー暴走明日を思わざる 路郎

333川柳会 (堺市)

社長さん深せば同じ作業 林 元歩報
ベレー帽が似合い文士の端にいる 好郎
勝りある制服も着ず鉢巻し 雄声
植木鉢逆さにしたよなニユーハット 狂二
はげかくす為の帽子がよく似合い 南宗
妃殿下と同じ帽子よりどう似合い 雪山
天皇の帽子は片手で持つものか 新石
泣きべそ笑顔で受話器と置き 一菜
にらみ合つただけで泣きべそ涙ぐみ 元歩

富柳会句会 (富田林市)

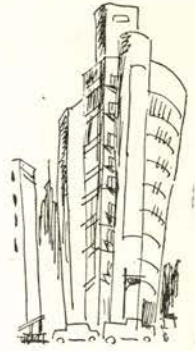
阿部柳太報

共稼ぎ妻の予定も書く手帳 とも子
審査員の手帳の文字が気になり 美代
手帳には書けぬ会議の日の続く 尚史
絶景へ句帳ひらいた日の続く 好郎
爪の垢煎じて飲めと強意見 雄声
エリ垢も流石末と云う女 六竜子
清浄無垢一目惚れするバスガイド 東雲楼
道後まで垢を落しに行くもよし 摩太郎
あかなんかどうでもよいと治つて 紅月
嫁ぎ行く今宵へ処女のあか流す ひろむ
垢ぬけた女に窓から出した首 柳太
顔かたは垢抜けていて爪に垢 八郎
所得倍増垢たまる様にゆきまん 周一

梅里の店 大萬

★大万川柳(第百二十五回)を募る
兼題「七」ども 路郎先生選
締切・七月十五日 五句以内
発表・七月廿一日 (店内掲示)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛

酌よし 千日前大劇裏 TEL⑧二七〇
味よし アベノ橋近鉄地下 TEL⑦〇一四七



柳 樽 室

路 郎 生

★いつの間にやら扇風機が顔を出している。★光景下の朝から夜までの仕事は忙がしい。★考えて見ると多忙ぐらい詰らぬものはない。★よい作品は決して多忙からは生まれな。★しかし、レジャー、レジャーといつてムダな日を消して、それでいい句が生まれる訳でもない。要は静かに人生を凝視して人間にみがきをかけることである。ああ、しんどいかな川柳人と云いたい★全国の各誌を見ていると、先人の貴重な遺産を少しも見ないで、ただガムシヤに作句している人や、既に言いふるされた議論の蒸し返えしばかりしている人の余り多いのに呆れる。しかし、何が貴重な遺産であるかを知ることが容易ではない

★豆萩が亡くなつて思ふことは、依頼原稿も少ない。六、七の二カ月も経って豆萩の死を惜しむ原稿が寄つたことであつた。それは彼の作品が物を云ふたに外ならない。年中ツベコベと議論ばかりやつている連中や売名的な多作作家へ無言の教訓だ云えよう。

★彼が遺してくれた多くの名作は何れ、一周忌までには「豆萩句集」を出し、彼の句を受する人達の

★若い人の進出を切望する。詩はリクツではない。新感覚で、ドシドシ作ることだ。いく

★八月号へあなたの中見舞廣告を★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は七月十日着便。

★広告料は前金のこ(郵券代用でもよろしい)

募るを告舞見中夏歓交人柳

川柳雑誌社

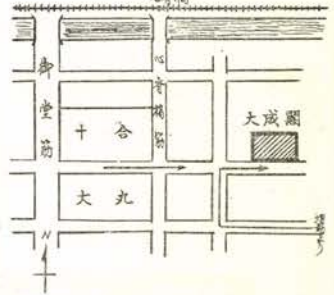
★私はだいたい元気をとり戻した。まだ地下鉄の階段や駅のプラットホームへの階段を上るのには後押が必要だ。それでも旅へ出たい希望がムラムラと湧く。諸氏が本号を手に入れるころには四国の青空を眺めているかも知れない。今度は静かに一人で土をひねりたい金額である。

★郵税が改正されたので、「社の黒板」をよんで読んでいただきたく。

▼ペンの散歩▲

▼七月号の編集後記は故豆萩氏の原稿のこと、川柳まつりのこと、先生が四国路へ旅を書くつもりをしていて先生が全部書いてくださった。

▼ペンが散歩するといつても、散歩区域があつて、編集の棚内をウロウロするだけだが、この行数のつき当りである日だけ。(一三夫)



(自動車の一方通路)でペンを歩かせてみよう。

社の黒板

★川維土佐支部を六月一日に高知県高岡郡佐川町黒原に新設。支部長建沼康之介氏。

★川維阿倍野支部では支部創立者の豆萩を失つたので、支部強化のため金井文秋氏の発案で松江梅里氏を支部長に推し、けんきよな文秋氏は従来通り会務に尽瘁されることとなった。

★誌代・郵送料共に六月以降は既報の如く値上げになつたので計算違いのないようお願いする。(但し五月末までに前金を納入されたい方、その前金が切れるまでは旧誌代で送本)

★郵便料金と取扱方が改正されたので、柳誌・柳書・柳箋・句帖などのご注文、寄稿・投稿其他の郵便物発送については特に留意していただきたい。

★普通郵便に現金封入は出来ないことになつたので、送金には最も安全な振替口座を利用されたい。

★開き封で句稿を送られる方は目方に気をつけられることをお願いする。五〇グラム毎に十円と改正されたが、いまだに、八円切手で送られる方、目方がオーバーしているのに、十円貼っていられる方には郵便運配の原因にもなるので困っている。柳務快速にご協力ありまし。

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急 運転
座席指定 特急券
お求めは 各乗車の5日前から

近畿日本鉄道

七月の句会

川維支部

七月句会・川維支部

宇部句会・2日(日)一時、瀬、はち・空
 藤・軽岡・星崎・母後・最後、所、宇部市津
 町鉄道職員会館・玉造句会・13日(木)七
 時、瀬、はやはや・国早・B・G・所、市電東
 豊南白米大阪信用金庫・淀川句会・11日
 (火)六時、瀬、青草・直・便り・均、所、
 十三西之町五丁目東洋川郵便局・京都句
 会・16日(日)夕、瀬、喘き・青南・動物、
 所、未定・阿倍野句会・20日(木)六時
 半、瀬、別れ・信心・晴まかり、所、黒町・
 丁目金塚会館・南海電鉄句会・20日(木)
 六時半、瀬、山迎え・美子・宇宙、所、舞波
 高室下瀬和・にしなり句会・23日
 (日)六時、瀬、瀬・君と僕・七月、所、重
 出新町通一・一後藤海志居・333句
 会・27日(土)六時、瀬、立話・君がかり・外
 所、所、堺市・松野・島野・葉下・奈良句
 会・15日(土)一時、瀬、海・夕立、所、奈
 良高松・文明和研究句会・9日(日)一時、
 瀬、キ・魚・所、所、阪神鳴尾駅東
 南二百・鳴尾公民館

麻生路郎著

好評嘖々

新川柳鑑賞

川柳の味方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年か
 ら川柳を手がけているというから
 川柳鑑賞はもう五十五年にもなる。
 この著者は麻生さんが毎月出し
 ている「川柳雑誌」に掲載された
 ものを中心にその他の柳誌や句集
 からひろった五百六十句につい
 て、ひとつひとつ丁寧な注釈を加
 えて、鑑賞の手引に資するとして

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方
 がなかなかうがっていて、一氣に
 読ませる魅力がある。

川柳雑誌社

電話 大塚 八二
 本社 大塚 八二

価二五〇円

送費八〇円

B・G・版

五・全頁

川柳とは何か

送価 七五〇円

川柳の作り方と味方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
 絶叫・嘆息・嘆声・鳴咽——そうしたもの
 もろろ十七音に圧搾された感情と諷刺の短
 詩型、それは伝統的であると共に常に革新
 的であるその川柳がいかんして発生し、経
 過し、今日に至り、将来に動くか、しかも
 その作り方は、味わい方は——以上を最も
 明快にわかりやすく、所界の第一人者たる
 著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区三丁目27番 電話東京22507

募集

課題吟募集

大鶴 高由選
 八木 摩太郎選
 直原 七面山選
 (七月十五日締め切)

天西 八雲選
 安瀬 貴山選
 中島 小石選
 (八月十五日締め切)

近作柳橋 (毎月廿四日以内)

北川 春葉選
 麻生 路郎選
 藤 章 (評論・研究・感想其他)
 (毎月十五日締め切)

投稿規定

▼ 投稿は各稿必ず別紙に認め、住所氏
 名推挙を明記する事。
 ▼ 「近作柳橋」は一般作家の雑吟を募
 る。
 ▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
 ▼ 「川柳塔」の投稿は不刊詞会員に限
 る。

川柳雑誌 第三十六号

定価 九〇円 (送料六円)

昭和三十六年六月廿五日印刷

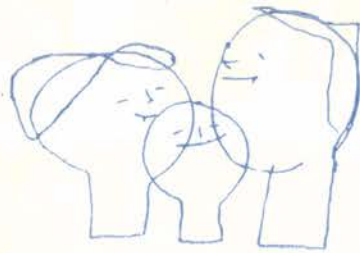
昭和三十六年七月一日発行

発行所 川柳雑誌社

電話 大塚 八二
 本社 大塚 八二
 印刷所 大塚 八二

printed in Japan

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 64551-2



万人
その名を知り
万人
その味を賞す

世界の名酒

サントリー

オールド 1,600円・角瓶 1,250円 (洋酒の毒屋)

お洒落の決め手

服飾研究の専門家は「まず型くすれないこと」を大切なお洒落の決め手として挙げています
「東レテトロン」はハリがあるので申し分なく軽く着られます。シワになりにくく、雨にぬれても、洗っても、ズボンの折れ目が消えないフリース性のすばらしさは、もう評判のとおりです。柄もグッと豊富な「東レテトロン」で完ぺきな洒落を楽しんで下さい

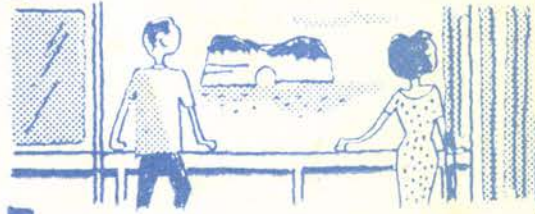


EASY CARE ノ手のからないせんい
東レテトロン
紳士服・替ズボン
東洋レーヨン株式会社



ホテル 白浜温泉 平草原
パシフィック

TEL 白浜温泉733 大阪案内所(64)8686



白浜口ゆき 直通列車	才2きのくに	毎日	なんば発	12.37
週末準急くろしお 土曜ごと	ク	ク	ク	13.10
新宮ゆき 直通列車	なんぎ1号	毎日	なんば発	8.10
夜行直通	ク	ク	ク	22.07

のりば大阪なんば

南海電車